

---

# モンスターハンター【賢者の遺産】

スノーマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター【賢者の遺産】

### 【Nコード】

N3232L

### 【作者名】

スノーマン

### 【あらすじ】

ここは、人とモンスターが共存する世界。

人間は文明の利器を用いて、モンスターは己が生命力の全てを賭けて、争い、手を取り合いながら、この世界は循環していく。

そして、物語は一人の狩人<sup>ハンター</sup>【ラストイ・シューマツハ】を中心に動き出す。

闇の中で蠢くモノは何か？

10年前の事件の真実とは？

全ては“賢者の遺産”へと繋がる……

## **Act.1 Name is the SONIC【音速の名を持つ狩人】**

こんにちは、または初めまして、スノーマンです。

この小説をご覧頂く前に注意事項があります。

モンハンの基礎知識はしっている事前提に書くので、あまり細かい説明は致しません。というか、そんな高等技術ムリですw

それでもOKな方、1ボタンをポチッ！

## Act.1 Name is the SONIC【音速の名を持つ狩人】

緑溢れる豊かな自然。

透き通った蒼い海。

そして、数多のモンスターが生態系を織り成す狩場。

ここはノーレ密林。

海に隣接し、比較的温暖で、数多くのモンスターが住み着き、また  
は移動してくる。

それこそ弱小なモンスターから、強大なモンスターまでこのノーレ  
密林までやってくる為、ハンター達にとって最もポピュラーな狩場  
となっている。

そして今日も、ノーレ密林へ仕事をしに来たハンターが1人：

「♪」

ノーレ密林北側の砂浜のあるエリアで、1人の青年が肉焼きセット  
を使って、肉を焼いている。

この青年の名はラスティ・シューマツハ。

モンスターを狩る事を生業とする狩人、ハンターだ。

組み立て式の椅子に座って肉を焼いているラスティは、ランポスシ  
リーズという軽装の防具を身に纏い、背には骨刀【狼牙】という太  
刀を装備している。

ただ1つおかしな点は、頭部にある。

身体は防具を着ているのに対し、何故か“頭”の防具だけ着けていないのだ。

その為、短かめの赤い髪に前髪が少しウェーブがかっており、中性的で端正な顔立ちをしているのが伺える。

本来、防具というのは“頭”“胴”“腕”“腰”“脚”に分けられる5つのセットを一式揃えて装備するのが基本である。

だが、例外が無い訳ではない。

一部のハンターは“視野が狭くなる”“重くて肩が凝る”等を理由に、頭の防具だけ装備しない者もいるのだ。

ラスティも、その“例外”の1人なのだ。

ただその場合、頭は全くの無防備となって、危険性が増すというデメリットが伴ってしまうのだが。

「上手に焼けました、と」

肉を焼き終えたラスティは、満足気に言葉を溢し、食事に取り掛かる。

先程ラスティが歌っていた鼻歌は、肉焼きの歌である。

肉焼きの歌とは、肉をちょうど良くこんがり焼く時間を計るものだ。所謂、目安である。

肉焼きセットは、狩りという激務に耐えられる耐久性を求め過ぎたせいで、同時に火力もかなり高めに設定されてしまっている。

ものの10秒でベストなこんがり肉を作れるが、油断すると…消し炭と化する。

（やっぱアプトノスの肉はうめエな♪）

肉にかぶりつきながら、ラスティはそんな感想を抱く。

アプトノスというのは、この密林や森丘に生息している草食系のモンスターだ。

その肉は人間でも食べられる為、現地調達の食料としてハンター達には重宝されている。

青年は肉を食べ終え、肉焼きセットを片付け始める。

——ガサガサ…

肉焼きセットを片付けている最中、ラスティの背後で動く影が1つ…

「ギヤアッ！」

そして“青い影”はラスティに飛び掛かる！

だがラスティは、口元をニヤリと吊り上げた：

ラスティは背中中の骨刀を掴み――

――ザンッ！

「ギャ…！？」

振り向き様に抜刀、青い影を横に一閃し体を分断した。  
青い影はドサッと落ちて、鮮血が吹き出す。

「来やがったな」

ラスティを襲ったのはランポス。  
青い鱗が特徴的な、トカゲのような外見を持つ小型の鳥竜種である。  
肉食で攻撃的な性格をしており、人間にも躊躇いなく襲いかかる凶  
暴なモンスターだ。

付け加えるなら、ラスティが着ている防具は、このモンスターの素  
材で出来ている。

そしてこのモンスターの1番厄介な所が：

「ギャオワッ！ギャオワッ！」

主に群れを成して行動する点だ。

最初のランポスが殺られたのを皮切りに、次々と仲間のランポスが姿を現し、ラストィを取り囲む。

その数、10体。

こんな多数のランポスに囲まれては、例えば中堅ハンターでも苦戦は免れない。

ましてやラストィ、装備を見て分かる通り、まだ新米である。ルーキー

絶体絶命、誰もがそう思うだろう。

青年が“ただのルーキー”ならば：

「“また”このパターンか、懲りないねエ…」

包囲されているにも拘わらず、青年は呆れたように笑う。さらには骨刀を構えもせず、だらりと自然体を下げる。もはや、青年はリラックスしているに近い。

ランポス達はじわりじわりと青年との距離を詰めていく。だが青年はリラックスしたまま。

そして――

「ギャオワッ！」



青年の背後にいた1体のランポスが、口を開けて牙を剥き出して、青年に襲いかかる！

「おっと」

青年はそれを身体1つ分右に動くことで、紙一重で回避する。まるで最初から背後から襲って来る事を分かっていたように。

すぐに青年は骨刀をランポスの喉元に押し付け：

——ズバツ！

両手で一気に骨刀を振り抜いた。  
喉を裂かれ、動脈を断たれたランポスは盛大に血を吹き出し、力無く倒れた。

「ギャアッ！」

「ギャオワッ！」

さらに仲間を殺られた事でランポス達は怒りを露にし、次々と青年に襲いかかる。

「ギャア！」

正面の3体のランポスが口を開け、噛みつかんと迫る。  
ラストイは骨刀を構えて迎え撃つ。

「でええいッ！」

ラストイは骨刀を大きく振りかぶり、勢いを乗せて薙ぎ払い、ランポス3体纏めて斬りつける。  
この一撃をモロに食らったランポス3体は仰け反る。

「ふッ！」

ラストイは仰け反った3体の内、真ん中の1体目掛け、左手を大きく前に突き出す片手突きを見舞う。

それは見事頭部に命中し、脳を貫通したランポスはたちまち絶命した。

「ギャオワッ！」

「ちッ！」

休む間もなく、左右からもランポスが襲いかかる。

ラスティは骨刀を瞬時に引き抜き、前方にローリングすることで回避する。

正面のランポス2体の間に入ったラスティは、回転斬りの要領で2体纏めて仕留める。

残るランポスは6体。

「どらアアア!!」

包囲から抜けたラスティは、次々とランポスを倒していく。

斬り、薙ぎ、突き。

荒々しくも、一切の無駄が無いラスティの剣捌きに、ランポスは為す術なく刃の餌食となっていく。

実はラスティ、ランポスを相手にするのは初めてではない。

装備している防具は、主にランポスの素材を使うランポスシリーズ。骨刀【狼牙】も、鞘の素材にランポスの皮が使用されている。

これらの装備を揃える為、ランポスを狩り続けたラスティは、パターンや弱点も全てお見通しなのだ。

それにラスティの高い戦闘センスが加わる事で、このような圧倒的な戦いが実現するのだ。

「ちょいさッ！」

残る最後の1体を斬り上げる。

ランポスは吹っ飛び、うめき声を上げて絶命した。

全くの無傷でランポス10体を討伐したラスティ。

くどいようだが、まだまだ下位の新米ハンターである。

「ふう…これだけやりア、“奴”も来るだろ」

骨刀を納め、ランポスの剥ぎ取りを開始するラスティ。

だが、ランポスの死体の何体かは、既に溶解を始めていた。

モンスターは死亡すると、体から溶解液を分泌し、土へと還る特性がある。

小型モンスターは、特に溶解が早いのだ。

剥ぎ取れるだけ剥ぎ取ったラスティは、どかりと地面に座って、骨刀の研磨に取り掛かる。

先程の戦闘で落ちた切れ味を、回復する為である。

（けど、一気に10体も襲ってくるなんてなァ…。ちとビビった…）

骨刀の研磨を終え、木に寄りかかる。

暫く休んでいると、東側のエリアから“奴”が現れた。

「ギャア！ギャア！！」

ドスランポス。

体はランポスより一回り大きく、頭の赤い鶏冠トサカが特徴の、ランポスのリーダーである。

両手両足の1本だけ異様に発達した爪が、より一層凶暴性を引き立てている。

さらに背後には5体のランポス。

よく見ると、体の各所に古傷があり、ドスランポスの親衛隊だと分かる。

「待ってたぜ、本日のメインディッシュ！」

ラストイは立ち上がり、骨刀を抜き放つ。

そしてドスランポスに向かって突っ込んでゆく。

音速の狩人は駆ける…

ただ、敵を狩る為に…！



**Act.1 Name is the SONIC【音速の名を持つ狩人】**

《名前》

ラスティ・シューマツハ

《年齢》

17歳

《瞳》

赤

《髪型》

短めの赤髪。

前髪が少しウェーブがかっている。

《身長》

185cm

《装備》

武器…骨刀【狼牙】

防具…ランポスシリーズ（頭を除く）

《備考》

主人公。

唯一フェルト村に常駐するハンター。

まだ新米だが、驚異的な身体能力と戦闘センスを持っている。

冗談や悪ふざけを好み、好戦的な性格。

また、甘いものが大好き。

~~~~~

適当なプロフィールですいません。  
名前なんかもう趣味丸出しですw

さて、今回はドスランポス戦ですが…5対1かあ、やりすぎたかな？  
(爆)

次回も駄文になるかと思いますが、暖かい目で見てくださいm  
┌ m ─┐



**A c t : 2 \ L i g h t n i n g 【電瞬一撃】 \ (前書き)**

字数を考えて、今回は短いです。すいません。

村に帰る所まで書くと、中途半端になりそうだったんで(汗)

## Act..2～Lightning【電瞬一撃】

「待ってたぜ、本日のメインディッシュ！」

骨刀を肩に担ぎ、ラスティはドスランポスへと走り出す。

「ギャオワッ！」

対するドスランポスは怒号を発し、5体のランポスがドスランポスを守るように陣形を組み、ラスティに突撃する。

両者の距離は瞬く間に縮まっていき、骨刀の攻撃範囲<sup>レンジ</sup>に入った。

「どらアッ！」

強く踏み込み、担いでいた骨刀を振り下ろす。

陣形の中央のランポスが、その一撃を頭に受け息絶えるが：

「ギャア！」

他のランポスが黙って見ている筈がない。

斬られたランポスの左右にいた2体が、斜めから同時に襲いかかる。

「ちッ！」

ラストイはそれを咄嗟に屈む事で辛うじて回避。  
普通ならこの後バックステップで距離を取るのだが…

——ドガッ！

「ギッ！？」

何とラストイはその場で立ち上がりながら、右手に持っている骨刀の柄尻で右のランポスの顎を殴った。

「ふッ！」

さらにそのランポスの頭に蹴りを放ち、予想外の攻撃にランポスは大きく仰け反って、たたらを踏んだ。

そしてすぐにラストイは反転、身体を捻らせながら…

「でいやッ！」

骨刀を後ろに大きく薙ぎ払い、左のランポスを斬りつける。

体を大きく挟まれ、ランポスは吹き飛んだ。

さらにラスティは骨刀を逆手に持ち変えて、背中越しに先程蹴ったランポスに突き刺した。

「ギャ：アア：」

刃は喉を貫通し、ラスティは骨刀を引き抜くと鮮血を吹き出し、倒れた。

残りはランポス2体にドスランポス1体。

このランポス達は、最初一氣に3体のランポスがラスティになだれ込んだ為か、同士討ちを恐れて攻撃を渋っていた。

「ギャオワッ！！ギャオワッ！！」

ランポス達は吠える。

目の前で仲間を殺された恨みを込めて。

「ほらどうした？俺にキズの1つでもつけてみろよ」

そんなランポスを他所に、ラスティは骨刀を納めて、大げさに両腕を広げてみせる。

完全な挑発。

ランポス達の威嚇に対し、ラスティの無防備極まりない行いは、ランポスを怒らせるのに充分だった。

「ギャアッ!!」

すっかり頭に血が登ったランポス達とドスランポス。

1体のランポスはラスティに飛び掛かり、もう1体は一拍置いて飛び掛かる。

それらを全て紙一重にかわし、1体のランポスの喉を突き刺し…骨刀から手を離れた。

そして最後に残ったランポスの頭と顎を掴み…

——ゴキヤッ

ランポスの首をへし折った。

ドサッと、ランポス2体は同時に倒れた。

「やっと1対1《サシ》で出来るぜ」

ランポスに刺さったままの骨刀を引き抜き、肩に担ぐラスティ。

「ギャアアッ!!」

そして、正面から迫るドスランポス。

鋭い牙をギラつかせながら、止まる事なくラスティに突貫する。

ラスティは剣先をドスランポスへと向け、左手を峰に添えて、狙い澄ますような突きの構えをとる。

「集中…!」

目を鋭く細めて、精神を集中し、ドスランポスを迎えうつ。  
必要最低限の力で構えながら、迫り来るドスランポスを見つめるラスティ。

攻撃のチャンスは一瞬のみ。  
その一瞬に、自分の最大限を出せばいい。

——そして、その時が来た。

「ギャアッ!」

今まで以上に大きく口を開け、ラスティの頭を噛み砕くべく、牙が迫る。

——これだ。

ラストイはニヤリと、口を吊り上げる。

俺はこれ waited たんだ。

大きく口を開く、この一瞬を…！

「ビンゴッ！！」

ドスランポスの口の中に、ラストイは全力の突きを放った。  
力が、踏み込みが、体のバネが、ラストイのフルパワー。  
それは人間の目では、到底捉えられるものではないだろう。

——ザシュッ！！

ラストイの神速の突きは、吸い込まれるようにドスランポスの口内へ、深く深く突き刺さった。

その一撃は喉を貫き、内臓をズタズタに抉り、心臓を斬り裂いた。

「ギャ…！」

何が起こったのかさえ分からずに、ドスランポスは瞳を閉じ、生命活動を停止した。

たった一撃。

たった一撃で、さらには無傷でドスランポスを仕留める新米ハンターなど、いまだかつて存在しただろうか。

あり得ない。

年間、新米ハンターがドスランポスに挑んで命を落とすケースは後を絶たないのだ。

それなのに、ラスティは1人で10体のランポスに囲まれても一瞬でそれを駆逐し、ドスランポスを一撃で斬り伏せた。

いくらランポスに慣れていようが、これらを成し得たラスティは、まさに天才と言えよう。

ラスティはドスランポスから骨刀を引き抜く。

支えが無くなった事で、ドスランポスの体はゆっくり傾いていく。

そして、骨刀をポイツと真上に投げた。

「クエストクリア、てな」

投げられ、落ちてくる骨刀は綺麗に鞘に納まり、カチンと刻みの良い音が鳴った。

その音と同時に、ドスランポスはドサツと地に伏せた。



**Act.: 2 \ Lightning【電瞬一撃】 \ (後書き)**

ランポスの首をボキッ♪

え？素手でモンスター殺るのはタブー？

マジすか(。□。；)

力を込めるのは一瞬…ホントにそうなんですよね。  
剣道やってるとその通りだと痛感します…。

さて、次はやっと村に帰ります。

あかん、村民の名前決めてねえww  
でも頑張ります。

ではノシ

## Act..3 Felt village【フェルト村】

夕暮れの近い昼下がり、平野の草原の一筋の道を、なぞるように竜車がのんびりと歩を進めている。

竜車とは、草食竜アプトノスに荷車をくくりつけた、1つの交通手段の事である。

移動速度は馬車より遅いが、安価さとアプトノスという運転のしやすさから、ハンターや商人、一般人に移動手段として重宝されている。

のんびりと進む竜車、荷車の席から手綱を引く赤髪の青年が1人。

「あーやっと着いた」

ラストイである。

欠伸をかきながら出たその台詞は、自分の故郷の到着を意味していた。<sup>あくび</sup>

ラストイの視線の先——平野の小さな村、フェルト村が見えてきた。

〃

「よっと」

フェルト村に入り、荷車の席から飛び降りるラスティ。

「キュク〜♪」

「ハイハイ、アレックスもご苦労さん」

ラスティのアプトノス——アレックスも村に無事帰れた安堵感が  
出た為か、ラスティに頬擦りしてくる。

ほんの数回とはいえ、アレックスと共に何度も狩場へ赴いているの  
だ。

アレックスは元々人懐っこい性格でもあり、今ではすっかりラスティ  
になつている。

すり寄るアレックスを適当にあやして、ラスティとアレックスは歩  
き出した。

フェルト村は一言で言えば、温暖な平野地帯に作られた村である。

その為、地面の高低差は殆んど無い。

そしてこの村は、そんな平坦な敷地を利用し、主に農業が盛んに行  
われている。

その規模は、村の敷地面積の7割を田畑が占めている程だ。

“フェルト米”は「大陸一品質が良い」と評判である。

先程述べた通りフェルト村は小さな田舎村なのだが、田畑の面積も  
視野に入れた場合、その大きさは並の都市ぐらいに匹敵する。

と言っても、農業ぐらいしか特筆する所がなく、外来の客は流浪の  
商人が時々訪れるくらいである。

本当にのどかな村なのだ。

「あ、ラスティくんお帰り〜！」

ラスティは声の聞こえた方向へ振り返った。  
1人の少女がラスティに駆け寄って来る。

「よオ、ただいまミレーヌ」

「ドスランポスだったんだよね、怪我してない？」

「楽勝楽勝♪。あれぐらい一撃でKOだ」

心配そうに訊いてくる少女とは裏腹に、武勇伝を語るようにラスティは答える。

彼女はミレーヌ・クルス。

フェルト村の酒場の1人娘であり、ラスティの1つ下の幼なじみである。

髪は青いセミロング、瞳も頭髮と同じく青色をしている。

ミレーヌはラスティが怪我一つなく帰ってきた事に安堵し、「アレックスもお疲れ様」と言ってアレックスを撫でた。

「ねえねえ、一撃ってどんな風に倒したの？」

「まア：アレだ、そいつアR指定だ」

口の中ブツ刺して、内臓かき混ぜたなんて言えるか。

思えば結構グロテスクだったと、ラスティは内心苦笑する。

そんな他愛のない会話をしてながら歩いていると、ラスティは道行く1人の男性に気づいた。

「おい村長さーん！今帰ったぜー！」

「やあ、お帰りラスティ君」

村長と呼ばれた男性もラスティに気づき、柔らかな笑顔で挨拶する。

彼の名はロジャー・バートン。

ラスティの言った通り、ここフェルト村の村長である。

茶色い瞳に短くさっぱりした金髪という出で立ちで、ほがらかで暖かい性格から村民に慕われている。

何より特徴的なのは長く尖った耳。

これは竜人族特有の耳であり、村長もまた竜人族なのだ。

竜人族は普通の人間より頭の情報処理能力が高く、寿命も長い。

因みに村長、外見は20代に見えるが、実は190歳である。

「ちゃんとドスランポス狩ってきたぜ、ほら」

そう言ってラスティは、荷物からドラゴスの生首を取り出した。討伐クエストの場合、成功した証拠として、討伐対象の剥ぎ取った素材を見せるのだ。

村長はうんうんと満足気に頷く。

ミレーヌは…

「はわわッ！？こ、怖いよラスティくんッ！」

「そーら、ガオガオー」

「ち、近づけないでー！！」

ミレーヌには刺激が強すぎたらしく、さらに生首を目の前に出されて涙目になってラスティから離れる。その様子を、村長は笑って見ていた。

そうして暫く3人（と1体）は喋りながら歩き続けてる内に、ラスティの家に着した。

ラスティの家は一般人の普通の家とは違い、一回り大きい。ハンターという職業柄、装備や素材などの荷物が多いためである。

「じゃあ俺は先に風呂入るからさ、報酬金は後で貰うよ」

「分かった、それじゃあミレーヌちゃんの酒場でね」

「オーケー」

「それじゃあ、またねラスティくん」

「おう、またな」

短いやり取りの後、ミレーヌと村長はそれぞれ家に帰っていった。

二人を見送り、家の横の小屋にアレックスを入れた後、ラスティは家に入った。

家の中には意外と綺麗に片付けられており、まず広いリビングに出る。テーブルやソファー等の日用品は完備され、暖炉も備えつけられている。

奥にはキッチンがあるが、ラスティはいつもミレーヌの酒場で食事を済ます為、使われる事は殆んどない。

地下には道具や装備を保管する為の倉庫があり、二階には沢山の部屋の1つにラスティの部屋がある。

そんな家に、ラスティは1人で住んでいる。

ラスティには、血の繋がった家族がない。

何故なら昔、当時フェルト村のハンターだった男が幼いラスティを拾ったのだ。

ラスティは、捨て子だった。

男はラスティを、“息子”と呼んでくれた。

ラストイも男を、“父”と呼んだ。

父は女好きで、マイペースで、ぐうたらで、朝から酒を飲むようなダメ人間だ。

けど、優しくて、暖かくて、強かった。

村にドスランポスの大群が来ようとも、飛竜の番が来ようとも、黒い太刀と黒い鎧を身に纏い、圧倒的な強さで村を守ってくれた。

自分は父の背中に憧れた。

父のようになりたくて、どんなに厳しい訓練にも耐えて、1ヶ月に自分は漸くハンターになれた。

そして父は、こう言った。

——これからはお前の時代だ、お前なら村を任せられる。  
…また会おうぜ、マイサン——

そして父はフェルト村を去った。

ハンターを引退し、驚く事に大陸首都ドンドルマの知事に就任した。

「あゝ汗臭エ〜…」

ばやきながら防具を投げ捨てるように脱ぐラストイ。  
それだけ早く湯船に浸かりたいのだ。



「あれから1ヶ月かア…。」

防具とその下に着る肌着であるインナーを脱ぎ終え、着替えとタオルを持って足早に風呂場へ向かった。

「ドンドルマ、行ってみるか」

**Act.: 3 Felt village** 【フェルト村】 (後書き)

キャラのプロフィールは次話の後書きにて述べさせていただきます。  
すいません m ( ( m

## Act..4 Go to the DONDOLMA【大陸首都へ】

日が暮れ始め、空が赤くなって来た頃、風呂から上がったラスティはミレーヌの酒場へ来ていた。

ラスティは私服に着替えており、黒いジーンズに背中に髑髏ドクロが描かれた白い七分袖シャツを着ている。

さらに首には小さな赤いアミュレットを掛けている。

これがラスティの普段のスタイルであり、目立つウェーブがかった赤髪と相まってよく似合っている。

…若干チャライ印象を受けるが。

軽い欠伸をかきながら酒場のドアを開けるラスティ。

「あ、いらっしやいラスティくん」

声を掛けたのはウェイトレス姿のミレーヌ。

両手に空の食器を乗せたトレーを持っていている事から、テーブルの片付けの最中だったのだろう。

「村長はもう来てる？」

「ううん、まだだよ。もうすぐ来るんじゃないかな？」

「そうだな、じゃあそれ片付け終わったら注文するよ」

軽く会話しながら、ラスティは近くの空いてるテーブルを見つけて席に座る。

ミレーヌは「うん！」無邪気な笑顔を見せて厨房へ入って行った。

ラスティは酒場を見渡すと、改めてこの酒場は広いと思った。

村唯一の酒場だけあって、設備もそれなりに充実していて、テーブルも多く、その気になれば村民全員入ることも可能だ。

何よりミレーヌの両親が作る料理はどれも絶品であり、平日であっても結構客が来店するのである。

ラスティはメニューを開いて料理を決めていく。

ドスランポスを狩って懷に余裕がある為、値段が高めのメニュー欄に目を通した。

（まだ村長から報酬金貰ってねえけど、そんな時はツケでいいか）

なんて思いながら、ラスティはテーブルの呼び出しベルを鳴らした。チーンと高い音が鳴り、厨房からミレーヌが出てきた。

「注文は決まった？」

「おう、今日は奮発するぜ？ホワイトレバーのピザと、ミレーヌ特製ストロベリーサンデー1つ。

あ、ピザはオリーブ抜きでな」

「えへへ、承りました♪」

“ミレーヌ特製”の部分が嬉しかったのか、ミレーヌは上機嫌に厨房に戻っていった。

ラストイはメニューをパタンと閉じて戻すと、酒場のドアが開いて村長が入ってきた。

「お、村長。報酬金“3000Z”持ってきた？」

「バッチリ持ってきたよ、報酬金“2000Z”」

村長が正解。

村長は笑顔で「騙されないよ」とアピールして、ラストイとは向かいの席に座る。

そして村長は懷から報酬金の入った袋を差し出した。

ラストイがそれを受け取ると、村長は依頼書を取り出して印鑑を押す。

こうして、初めて公式に依頼が達成された事になる。

「改めて、ドスランポス討伐お疲れ様」

「もう慣れたもんさ、いい加減飛竜とかと戦ってみてエよ」

「あはは、ラストイ君は本当に狩りが好きなんだね」

「まあな。刺激があるから人生は楽しい、そうだろう？」

「…僕は平和が一番だなあ」

ラスティは好戦的に笑ってみせる。

ラスティらしい、と村長は苦笑いしか出てこない。

「ラスティくん、お待ちせよ」

厨房からミレーヌが出てきた。

持っているトレーにはラスティが頼んだ、草食獣ケルビの肉が使われたホワイトレバーピザと、パフエに苺がふんだんに盛りつけられたストロベリーサンデーが乗っている。

それらをテーブルに置き、厨房に戻——否、ラスティの隣に座った。

「あり？ミレーヌ？」

「お母さんが、店が落ち着いてきたから休憩していいって」

「ふーん…それで“俺の隣”に来たってワケ？」

わざと“俺の隣”を強調して、ラスティは不敵に笑う。

ミレーヌはボンツと顔をトマトのように赤らめ、慌てふためいてい

る。

（やれやれ、本当に仲がいいね）

なんて思いながら、村長は1人微笑みながらそのじゃれ会いに近い光景を見ていた。

ミレースが落ち着いた所で、ラスティはピザを一切れ手につけた。

「モグモグ：あ、そうそう、俺ドンドルマに出稼ぎに行こうと思っ  
てんだけどさ」

「「ええッ!？」」

突然のラスティの爆弾発言に驚く二人。

5日ぶりに帰って来たと思ったら、いきなり出稼ぎに行くといい出したのである。

驚きたくもなる。

だがすぐに冷静になった村長は、ラスティに問い掛けた。

「でも、どうして急にそんな事を？」

「モグモグ：クエストボード見たら1つも依頼はねェし、当分危険は無いだろうと思って」

ここまで言ってラスティはいつの間にか2切れ目を食べ終え、3切れ目に手を伸ばす。

クエストボードとは、言わばハンター達の掲示板みたいなものである。

クエストボードに貼り付けられた依頼書にハンターが名前を書いて、受付嬢もしくは村の村長に確認をとり、許可が降りれば依頼を受けられるシステムなのだ。

たがラスティの言う通り、生憎今は1つも依頼書が貼られていない。

「…すぐ行っちゃうの？」

「モグモグ…いや、3日ぐらいゆっくりしてくさ。それでも依頼が来なかったら、マジで行くつもりだけどな」

今度はミレーヌが質問して、ピザを食べながらも答える。

あっさりと事を決めてしまうマイペースさは、恐らく義父譲りなのだろう。

ラスティはこれまで採集、討伐問わず様々な依頼をこなしてきた。おかげで村の周りが平和になったのだが、裏を返せばハンターにとつての収入源が無くなってしまうのだ。

幸い、ラスティはこれまでの報酬金の貯蓄があるのだが：



「——いい加減ランポスに飽きちまった。もっと強エのを狩ってみてエ…！」

本人がこの調子である。

瞬く間にピザを食べ終えたラスティは、遂にデザートのストロベリーサンデーに取り掛かった。

このストロベリーサンデー、氷結晶に冷やされたバニラアイスを使用している為、実は殆んど溶けていない。

細かい所にも、ミレーヌの手腕がいかなく発揮されている事が伺える。

「くぅ〜♪やっぱ狩りの後のストロベリーサンデーは最高だぜ♪」

「えへへ〜♪どういたしまして」

絶妙な甘味が口の中に広がり、ラスティは満点の笑顔を浮かべる。ミレーヌもその反応が嬉しくて、同じく満点の笑顔を浮かべた。

「ラスティ君のお義父さん、元気にしてるかなあ…」

微笑みながら村長は呟く。

ほんの1ヶ月だが、村長としても良き友であったラスティの義父を懐かしむように。

ラストィは村長の言葉に、肩をすくませて答えた。

「女口説いては毎日ビンタ食らってんじゃね？」

この一言でどっと3人は笑い出す。

本当にそのような人物だった為、容易に想像がついてしまう。

その後も、3人を囲んだテーブルから笑いが絶える事は無かった。

こうして、戦士の休息を存分に堪能したラストィ。

その後の3日間は平和そのもので、村の農業を手伝ったり、夜には村の屈強な男達と酒の飲み比べに挑んだり、そこにはハンターとしてではなく、田舎村のやんちゃな青年ラストィ・シューマツハの姿があった。

そして4日目の朝、遂に依頼は1つも来ず、ドンドルマへと旅立つ時が来た。

フェルト村の入り口。

ラストィを見送る為、大勢の村人達が集まっていた。  
その中にはラストィの姿もある。

「気をつけてね、ラストィくん。帰ってきたら、狩りのお話聞かせてね！」

「オーケイ、土産にリオレウスの首でも持ってきてやるよ！」

ラストイの冗談に、村人達はどっと笑い出す。  
ラストイは必ず帰ってくる、そう信じているからこそ村人は皆暖かく送ってくれる。

既に荷物は童車に積み終えている。  
ラストイはアレックスに跨がり：

「じゃあ、行ってくるぜ！」

大陸首都、ドンドルマへと向かっていった。

Act. 4 Go to the DONDOLMA【大陸首都へ】（後書き）

しかし、駄文だなあ…

え？ラスティの台詞と食べ物の好みが、某デビルハンターと同じだ  
って？

気のせいです。

この作品はフィクションです。実際の個人、団体とは一切関係ありませんw

では、キャラのプロフィールを…

~~~~~

《名前》

ミレーヌ・クルス

《身長》

162cm

《瞳》

青

《年齢》

16歳

《髪型》

青いセミロング

《備考》

ラスティの幼なじみであり、酒場の1人娘。  
天然な性格だが、料理の腕は一流で、自身が開発したストロベリー  
サンデーはラスティの大好物となっている。

最近、一向に身長が伸びず成長するのは胸だけなのが悩みの種。

《名前》

ロジャー・バートン

《身長》

176cm

《瞳》

青

《年齢》

190歳（外見は20代後半くらい）

《髪型》

さっぱりした短い金髪。

《備考》

にこやかスマイルが売りな竜人族のフェルト村村長。  
「平和が一番」をモットーとするのんびり屋さん。

~~~~~

すいません！ミレーヌの両親や鍛冶屋を出せませんでした！m（  
じ m

さて、今回は早速ドンドルマに行っちゃう訳ですが…勿論新キャラ  
出ます。  
3人ぐらい出そうと思います。

それでは（＾Ｏ＾）／

**Act..5 Gunslinger girl**【隻眼の銃奏姫】（前書き）

えゝ新キャラの件ですが…

…二人しかでません。

当初は三人出そうと思ってたのに、何でこうなったんだろ（爆）  
駄文にも程がある（泣）

## Act..5 Gunslinger girl【隻眼の銃奏姫】

大陸首都ドンドルマ。

大陸の中央部に位置する大陸最大の都市。

様々な対飛竜防御施設を備えたこの街は、飛竜に限らず全てのモンスターに対し絶対的な防御力を誇る。

その為、ハンター達のみならず人々の一大拠点となっている。

長い歴史の中で、古龍を撃退した記録も残っている程だ。

そんなドンドルマには多くのハンター達が拠点を置き、その数は数百人と言われているが、正確な数を知る者はギルド、もしくは知事ぐらいだ。

さらに年間数千人のハンターがこの街に訪れていると言われている。

高い石造りの家、建物が立ち並ぶこの街は、連日多くの人々で賑わっている。

大通りには市がたち、工場は複数の煙突から絶えず黒煙が上がり、人々は活気溢れるように行き交っている。

そんな中を、ラスティは歩いていた。

「こいつアすげェ：さすが大都市って感じだな」

ラスティは行き交う人々の数に驚いていた。

祭りが興っているんじゃないかと錯覚する程に。

恐らく、外に出ている人間だけでフェルト村の総人口を越えているだろう。



目に映る全てのものが新鮮で、所々寄り道しながらもラスティは目的の建物に辿り着いた。

「ここだったな」

入り口で受け取った地図と見比べる。

その建物はドンドルマの中でも1、2を争う程の大きさの石造りの建物で、下は大きな酒場、そこから上は宿泊施設となっている。さすが大陸首都、村の酒場とは桁が違う。

中からは怒声や笑い声が聞こえ、料理の香ばしい匂いや酒の匂いが漂ってくる。

暇さえあれば、ハンター達は昼間から飲んで騒いで暴れているらしい。

ラスティは躊躇することなく、酒場のドアを開けた。

酒場に入ると、最初にむせかえるような匂いが鼻をつついた。

酒の匂い、タバコの匂い、さらに汗の匂いが料理の香りを塗り潰して、なんとも言えない匂いが充満していた。

（野郎の熱気がハンパねエ…気持ち悪い…）

こんな状況にラスティはげんなりする。

が、すぐに表情を切り替える。

自分はこれからこの中に入らねばならないのだ。

萎えてはいられない。

ラストイという突然の入店者に、何人か屈強な男達が睨み付ける。  
が、そんな生半可な気迫などラストイは軽くスルー。  
荷物を肩に引っ提げて、酒場に入り歩を進める。

ラストイに目を配ったのは、何も客の男達だけではない。

酒場の受付嬢、さらにはウェイトレスの全員がラストイに目を奪われていた。

容姿端麗。

180を越える長身。

さらにいつもの質素な私服を着ている為、スマートな体型が前面に押し出されている。

どこの雑誌のモデルが来たのかと疑ってしまう程、ラストイは抜群のルックスだった。

当然、ラストイはその視線に気づいていた。

（何かみんな俺見てんだけど…私服はまずかったかなア…）

間違った方向に解釈し、心の中で溜め息を吐いた。

この酒場にいる客はほぼハンター。

無論、全員防具を着ているし、武器も装備している。  
なのにラストイは私服。

理由は簡単。

私服の方が動きやすいから。

（まア必ず防具を着なきゃいけないってルールはねェし、大丈夫だろ）

と、ラスティは無理矢理納得する。

とりあえずストロベリーサンデー、もしくは何か甘いものを食べてから依頼を受けようと思い、空いているテーブルを探すが…

（マジかよ、1つも空いてねェ）

テーブルは全て埋まっていた。

真っ昼間から大盛況とか、やっぱ大陸首都は違うなア…

本日二度目の溜め息を吐くラスティだった。

甘いものは諦めて、大人しく依頼を受けよう。

ラスティはトボトボと受付に向かう。

その時、1つのテーブルから不愉快な声が聞こえた。

「——そんなつれない事言うなよ、なあいいだろお嬢さん？」

見なくても分かる、ナンパだ。

声のした方を見ると、1人で食事をしている少女にデブ、チビ、ノッポのズッコケ3人組が囲んでいる、といった具合である。

デブがハイメタシリーズ、チビがハンターシリーズ、ノッポがギア

ノスシリーズという防具を着ているが、どれも下の下に位置する防具だ。

こんな奴らがナンパしてんのかよ、とラストイは3人組に対して、呆れを通り越して称賛すら覚えた。

一方、長い銀髪の少女は完全無視を貫き、料理を食べているが、明らかに困っている様子である。

ラストイは周りを見る。

ハンター達は騒いでいて気づいていない。

ウェイトレスは忙しく動き回っている。

受付嬢は持ち場を離れられない。

ラストイは3度目の溜め息を吐いた。

(柄じゃねえんだけどな、こういうの…)

やれやれといった感じで、ラストイは銀髪の少女の元へ向かった。

ちょうどその時、無反応な銀髪の少女にとうとう堪忍袋の緒が切れたデブが掴み掛かろうとしていた。

だが――

――ガシッ

「――うぜえんだよ、ナンパに慣れてねエクセによ」

銀髪の少女に向かったデブの右手を、間一髪ラスティが掴み上げた。デブは一瞬驚いた表情を見せるが、すぐにラスティを睨み付けた。

「なんだてめえ！邪魔なんだよ！！」

デブの拳が飛ぶ。

が、ラスティはそれを首を軽く倒す事で避け、掴んでいるデブの腕を捻った。

「痛ええ！？や、やめろッ！折れる！！」

ミシミシと嫌な音を立てて、デブが悶絶する。

少し力を入れたら、本当に骨折してしまう程捻り上げられていた。

そんなデブの様子に、ラスティはニヤリと黒い笑みを浮かべた。

明らかに楽しんでいる。

もはやどっちが悪者なのか分からない。

…だが、ラスティの背後にはノッポの姿が。

手には空のビール瓶が握られている。

ノッポは空のビール瓶を振りかぶり――

「この野郎！離しやがれッ！」

——バリエイン！！

ラストイの頭に叩きつけた。

厚いガラスの強烈な粉碎音に、酒場の喧騒が一気に消え、シン…と静まり返った。

ノッポは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。  
ざまあみろ。

俺達の邪魔をするからだ。

ノッポは心の中で毒を吐くが……その表情は次第に青ざめていった。

「……やってくれるじゃねエか」

ビール瓶を後頭部に喰らったというのに、ラストイは微動だにしなかった。

血も出ていない。

全くの無傷。

ラストイはゆっくりと振り返る。

表情は前髪に隠れて見えない。

ラストイの身体中から滲み出るドス黒いオーラは、幻覚なのだと思います。

もう3人組は顔を真っ青に染めてしまっていた。  
ラストイはトドメの一言を放った。

「オーケイ、自殺志願者ってワケだな…ッ!!」

本気の殺気を放ち、キッと睨み付ける。

その鋭い眼光は、3人組だけでなく周囲の男性客も震え上がった。

「ひい!?!に、逃げろおおお!!」

まるで初めてランポスに遭遇した子供のように、3人組は脱兎の如く逃げ出した。

酒場も、もめ事の原因が消えた事でいつもの喧騒を取り戻した。

とりあえず追ひ払えた事にラスティは胸を撫で下ろした。

だが、やはり痛かったのか、後頭部を擦っている。

「……大丈夫?」

不意に、今まで黙っていた銀髪の少女が言葉を掛けた。

口調こそ静かだが、突然の介入者…それも自分を助けた見知らぬ青年に対し、驚きを隠せてはいなかった。

「へーきへーき。俺、石頭だし」

「……そう…ありがとう、助けてくれて」

「別にそんなじゃねェよ、単にあいつらがうざかったただけだ」

ここまで言って、ラスティは振り返る。

…だが、少女を正面に捉えたラスティは言葉を失った。

腰まで伸びた雪のように綺麗な銀髪、黄色よりも金色に近い瞳、美少女といっても過言ではない程整った顔立ち。

そして、身に纏っているのは見たことないガンナータイプの深緑の防具、レイアシリーズ。

雌火竜リオレイアから作られる防具であり、これを着ている事は相当の実力者である証でもある。

最後に、ラスティが絶句した点は――

(こいつ、目が…)

少女は、右目に眼帯を付けていた。  
。

決してアクセサリーではないのは確かだが、少女の静かで落ち着いた雰囲気と相まってよく似合っていた。

固まってしまったラスティに、少女はキョトンとして首を傾げた。

「……どうしたの？」



「あ、ああ…何でもねえよ」

じゃあな、と手を振って少女の横を通りすぎようとするラスティ。しかし、銀髪の少女はいきなり立ち去ろうとするラスティを呼び止めた。

「待って」

「ん？なに？」

「……あなた、ハンターなの？」

そう言って銀髪の少女はラスティの荷物を指さす。荷物の口からは骨刀【狼牙】の柄がはみ出していた。太刀は長い武器の為、荷物に入りきらなかったのである。

「ああ、そうだぜ。まだまだルーキーの身だけだな」

「そう…じゃあ、私も手伝うわ」

「手伝うって…クエストをか？」

ラスティの問いに、銀髪の少女はコクツと頷く。どうやら彼女はお札にクエストを一緒にしてくれるようだ。テーブルを見れば、料理は既に食べ終えている。

もう準備は出来ているらしい。

律儀なんだな、と思いながら頭をポリポリ掻くラスティ。  
ラスティ自身、お礼を貰う為に少女を助けた訳ではない。  
だがこの少女は、一緒にクエストに行くと言ってきた。

ラスティとしても、彼女の實力がどれ程か知らないが、戦力が多ければ狩りはやりやすい。

しかもガンナー。

前に出て戦う剣士にとって、後方支援は頼もしい存在だ。

ラスティは、断る理由が無かった。

「オーケイ、じゃあよろしくな。俺はラスティ・シューマツハ、太刀使いだ。

まア気軽にラスティって呼んでくれ」

「……イリヤ・ブラウニング、ライトボウガン使い。よろしく」

二人はお互いの自己紹介をして、握手を交わす。

ラスティがニカッと笑ったのにつられて、イリヤも少しだけ微笑みを浮かべた。

——その様子を、酒場の窓から見ていた銀髪の男性が1人。

「やるじゃねえか、マイサン」

男はフツと笑い、マイサン（息子）を窓から見つめて、その場を後にした。

心地よい風が、男の深紅のコートを揺らした：

**Act.: 5 Gunlinger girl**【隻眼の銃奏姫】（後書き）

《名前》

イリヤ・ブロウニング

《身長》

165cm

《髪型》

雪のように綺麗な長い銀髪。

《瞳》

金

《年齢》

16歳

《装備》

武器

ヴァルキリーファイア

防具

レイアシリーズ

《備考》

ライトボウガンを操る女ハンター。

右目に眼帯を付けている。

静かで落ち着いた性格で、あまり感情を表に出さない。

ラストイとは、ナンパから助けてもらった事をキツカケに知り合っ

た。

~~~~~

ミステリアスなガンナー、イリヤ・ブラウニング登場です！  
ガンナーというわけで、ファミリーネームは銃の名前を使いました。

次回はラスティとイリヤの二人で狩りに行きます。  
ドスランポスの次と言えば、アレです。

本編の最後に出た謎の男は…知ってる人は知っていますよね（爆）  
銀髪に赤いコート、です。

**A c t .. 6 ~ I n f o r e s t 【森丘の大怪鳥】 ~ (前書き)**

片手に世界史の教科書を持ちながら投稿です (笑)  
テスト勉強中に何やってんだ俺 : w

早速狩猟パートですが : まあ、タイトルで予想出来ますね w  
では、どうぞッ

## Act..6 In forest【森丘の大怪鳥】

ウステイオ森丘。

広大な森林と切り立つ絶壁の崖が特徴の狩り場。

深い森は神秘的で静かな空間を生み出し、小鳥のさえずりが心地よく響き渡る。

芝生が生い茂り開放的な丘と、日の光さえ完全に通さない深き森林は、まるで必要以上に他者を寄せ付けぬかのようだ。

そんな狩り場のベースキャンプと呼ばれる地点に、二人の若いハンターが来ていた。

「にしても悪イな。レベル低いクエストに付き合わせて」

「……構わないわ、手伝うと言ったのは私だもの」

ラスティとイリヤである。

ドンドルマから竜車で5日掛けて彼らはこの地へ来ていた。

竜車を引いたのは勿論、ラスティの飼っているアプトノス、アレックス。

イリヤは自分の竜車もアプトノスも持っていない為、アレックスと竜車をドンドルマの預託施設から引っ張り出して来たのだ。

レンタルも出来たのだが、それじゃ金が掛かるとラスティが止めた。正直、財布に余裕が無いのだ。

現在二人はベースキャンプに設置されている青い支給品ボックスから、アイテムの分配している。

因みにイリヤは今、戦闘時では無い為、頭パーツのレイアキャップの鱗布を顎まで下げている。

「……Lv. 1通常弾、散弾は当然私ね。地図はラスティが持って、携帯食糧は半分ずつ、応急薬は全部あげるわ」

「オーケイ……て、ちょい待ち！お前応急薬いらねエの！？」

「……ええ、不要よ。“イヤンクック”程度、どうって事ないわ」

怪鳥イヤンクック。

それが今回の狩猟目標である。

ピンク色の甲殻と大きい嘴が特徴の大型モンスターである。

翼を持っている為、飛竜種に間違われがちだが、ランポスと同じ鳥竜種に分類される。

イヤンクック程度と言われたラスティは、苦笑いしか出来ない。

無傷で倒す自信があるのだから、彼女の实力はかなりのものだろう。

二人はそれぞれ装備を整えると、地図を広げて作戦会議に入った。

「……まずイヤンクックに遭遇したら、あなたは突撃して。私はペイント弾を撃ってから援護に回るわ」

「お前、実はドSだろ？」



「……話は最後まで聞いて」

イリヤに軽く睨まれる。

まあ初見の相手にいきなり突っ込めと言われては、文句の1つも言いたくなるが。

話を続ける。

「……最初の内は攻撃は最小限に留めて、回避重視で戦うの」

「オーケイ、ヒット&アウェイってワケだな？」

「……そうよ。イャンクツクの基本的な攻撃パターンは、突撃、嘴のつつき、尻尾の振り回し、火炎液、この4つよ。だから初めの内は相手の攻撃を見切る事に努めて」

「了解！イリヤ隊長ッ！」

「……もう、ふざけないで」

無駄にビシッと綺麗な敬礼を決めるラスティに、イリヤの口からため息が零れた。

本当に大丈夫なのだろうか？

そんな呆れにも似た不安感が、イリヤの心を支配していた。

こうして簡易ながらも作戦会議は終了し、ラスティは地図をポーチにしまい、二人はベースキャンプのトンネルを潜った。

すぐに二人はエリア1という場所に出る。

目の前の小さな草原では3匹のアプトノスが草を食んでいる。

1匹だけ幼いアプトノスがいるということは、この3匹は家族だと容易に想像出来る。

右手には綺麗な川が流れており、その川の向こう側にいるアプトノスの群れもまた、草を食んでいた。

「平和だねエ…」

「……放っておきましょう。先に進むわよ」

そう言ってイリヤとラスティはアプトノスを無視して歩き出す。

無益な殺生はしない。

二人共、口に出さずともそれはわかっている。

狩猟と殺戮は似ているようで、全く異なるのだ。

エリア1を抜けて、先程より広い草原のエリア2に出る。

「待つて」

エリア2に入った途端、突然イリヤは歩みを止め、側の岸壁に身を潜めた。

ラスティもイリヤに倣って身を潜める。

突然のイリヤのこの行動、ラスティは答えが分かっていた。

「ランポスが3体、だな」

二人の視線の先、少し離れた所にランポスを見つけたのだ。幸い、3体はまだ彼らに気づいていない。

イリヤは自分の得物、ヴァルキリーファイアを構える。だが、ラストイはそれを右手を上げて制した。

「あれくらい1人で楽勝だ。それに、俺の実力も見てェだろ？」

「……そう、じゃあ任せるわ」

言われてヴァルキリーファイアの構えを解くイリヤ。

任せる、と言ったが実際はそこまで期待していなかった。

骨刀【狼牙】にランポスシリーズ。

はつきり言って、ラストイの装備は下の下。

イリヤには、ただの新米ルーキーにしか見えないのだ。

だからヴァルキリーファイアを背負い直すのではなく、“構えを解く”に留まった。

ラストイが危険になったら援護する為である。

「オーケイ、任されたぜ」

そんな事を欠片も感じていないラスティは、ランポスに向かって歩き出した。

もう一度言おう、“歩き出した”のだ。

「…ッ！？奇襲を掛けないの！？」

イリヤの疑問に、ラスティは「するまでもねェよ」と手をヒラヒラさせるだけ。

敵が気づいてないなら、奇襲を掛けて一気に殲滅するのが、狩りの常套手段である。

だがラスティはそんな事をお構い無しに、ランポスに近づいて行く。  
…堂々とした足取りで。

「ヘイヘイ！カモーン！！」

さらには大袈裟に手を叩きながら挑発する始末である。

（なんてバカなの…）

見ていられないと言わんばかりに、頭に手を乗せるイリヤ。

当然、ランポスがラスティの行為に気づかない訳がない。

「ギャア！ギャアッ！」

3体のランポスは振り返り、威嚇する。  
それでもラスティは歩みを止めない。

「ギャアッ！」

先に仕掛けたのは一番近くのランポス。  
跳躍し、ラスティを踏み潰さんと迫る。  
だが：

「よッ」

身体を僅かに右にずらし、紙一重に避ける。  
同時に右手は骨刀の柄を握っていた。

——ザンッ！

回避した瞬間に抜刀し振り降ろされた刃は、ランポスの首と胴体を見事に両断した。

(嘘…ッ!?)

ポトリと首が落ち、ランポスから鮮血が吹き出る。

イリヤは目の前の状況が整理出来なかった。

「おらァ!!!」

2体目のランポスが正面から噛みつかんと口を開くと、その口内に深々と骨刀が突き刺される。

喉を貫通し、一瞬で絶命する。

その隙に、ラスティの背後に回っていた最後のランポスが襲い掛かる。

…危ない!

咄然としていたイリヤはハッとして、慌てヴァルキリーファイアを構えた。

だが、またもイリヤは驚愕した。

なんとラスティは骨刀から手を離し、振り返りざまにランポスに裏拳を叩き込んでいた。

それによってのけ反ったランポスの頭と顎を両手で掴み――

「アディオス」

——ゴキヤツ！

ランポスツイスト炸裂。

嫌な音を立て、首を180度回されたランポスは、静かに地面に倒れた。

イリヤはヴァルキリーファイアを構えたまま、目を大きく見開いて硬直していた。

（信じられない……これがラスティ……！？）

とても新米ハンターとは思えない動きで、一瞬でランポス3匹を倒したのだ。

そもそも骨刀【狼牙】は、ランポスを一撃で倒せる程の威力はない。それなのに、首を切断、口から喉を直接突き破るといった離れ技で一撃必殺を実現してみせた。

さらにランポスを素手——首をへし折って倒すなど、聞いた事がない。

あまりに滅茶苦茶な戦い方。

しかし、それを実戦で通用出来る程の繊細を併せ持っている。

恐ろしく高い戦闘センスを持っていると、理解するのにそう時間は掛からなかった。

「イリヤ、片付いたぜ」

ランポスから太刀を引っこ抜き、鞘に納めてイリヤの元へ戻るラスティ。

「……あなた、本当に新米ルーキーなの？」

「ん？ ああ、そうだけど」

それがどうした？

と、何でもない風に返すラスティ。

「……そう、よね。じゃあ行くわよ」

歯切れの悪い返事を返し、イリヤは歩き出す。  
後ろから「なアなア、さっきのどうだった？」とラスティが聞いてきて、イリヤは立ち止まり、振り返らず答えた。

「……危なっかしくて、見ていられなかったわ」

冷ややかに呟き、再び歩き出す。

「マジかよ、厳しいなア」とラスティは苦笑しながらそれについて行く。



(……でも、経験を積みれば化けるかもしれないわね)

ラストイの前を歩きながら、イリヤは僅かに微笑を浮かべた。

口ではああ言ったものの、心の中ではラストイを評価していたのであった。

そのまま二人はエリア2を抜け、先程と同じような草原のエリア3へ出た。

エリア3は、まるで瓢箪ひょうたんのような地形をしており、飛竜の巢へと続く道が1本、森の中へ続く道が2本存在する。

「……ここにはランポスはいないみたいね」

瓢箪ひょうたんの奥に当たる場所まで歩いた所で、イリヤが呟く。

このエリアに居たのはランポスではなく、エリア1で見たような3匹のアプトノスの家族だった。

つまり、今このエリアは危険が無いという事になる。

「……ここで待ち伏せするわよ」

「待ち伏せ？探さねエのか？」

「……イャンクックもリオレイアも、必ず一度は此処に来るわ。それに此処は広いから、戦うにもちょうどいいのよ」

飛竜の巡回ルートにはこのエリアも含まれている。  
さらに場の広さもあり、このウステイオ森丘で飛竜と戦うエリアの  
1つとなっているのだ。

イリヤの説明に納得したラスティは、木陰にどかりと座り込む。  
イリヤは側でペイント弾の装填を始めた。

コッキングレバーを引き、予めセットしていた通常弾Lv. 1を取  
り出し、ペイント弾を装填して、レバーを戻す。

ラスティはその様子を、興味津々とばかりに見つめていた。

――不意に、ラスティの目の前を巨大な影が横切った。  
そしてその影は、二人の背後にピタリと止まる。

「おいでなすったな」

「……意外ね、こうも早く遭遇するなんて」

イリヤは表情を引き締め、レイアキャップの鱗布を上げて口元を隠  
す。

ラスティは、待ってましたと言わんばかりに勢いよく立ち上がり、  
首をポキポキ鳴らす。

そんな二人のハンターを他所に、アプトノス達は“奴”を確認する  
と、一目散にエリア外へと逃げていく。

二人の背後から、バサバサと大きく翼をはためかせる音が聞こえ始める。

それに伴い心地よい風が吹いて、ラストィの赤髪を、イリヤの長い銀髪を揺らす。

二人はゆっくりと、後ろに振り返った。

——ズズン……！

そして、“奴”は地に降り立った。

巨大な体躯。

桃色の甲殻。

翼には青い翼膜。

鳥のような、しかし巨大な嘴。

そう、このモンスターが——

「イャンクック……！」

イャンクックはすぐに二人に気づいた。

「クエエエエ……！」

イャンクックは二人の、自らの縄張りを侵した不届き者に向かって

威嚇を挙げる。

それに対しラスティは、口をまるで三日月のように吊り上げた。

「いいねエ…ゾクゾクしてきやがった…ッ！」

「……ラスティ、落ち着いて。作戦通りに行くわよ」

「ああ…分かってるさ…！」

ラスティは骨刀を引き抜き、構える。

早く戦いたくてウズウズしているようだ。

そんなラスティにイリヤは釘を刺して、ヴァルキリーファイアを構える。

「さアて…シヨウタイムだッ…！」



**Act..6 In forest【森丘の大怪鳥】（後書き）**

狩猟パートなのに、大した事してませんねw  
イリヤは何もしてませんし。

展開遅くてすいません。

次はいよいよイャンクックと戦います！

だいたい1、2話程度で終わらせる予定です。  
では～

…早くデビクラの方も更新しないと（一・一；）

## **A c t : 7 \ S c r e a m i n g o r s h a m e i n g**〔スクリーミング

毎回更新遅くてすみません。スノーマンです。

漸くイヤンクックと戦闘に入ります。

では、どうぞッ！

## Act.: 7 \ Screaming or shaming【スクリーミング・

「さアて、シヨウタイムだッ！」

骨刀を抜き放ち、イヤンクックへ走り出す。

威嚇しているイヤンクックを正面に捉え、踏み込む足に全体重を乗せて、骨刀を頭部に振り降ろす。

だが――

「チッ、固エ！」

イヤンクックの強固な嘴にその刃は弾かれ、僅かに切り傷を残すだけだった。

同時に、イヤンクックの体にピンク色の弾丸――イリヤのペイント弾が直撃した。

着弾した弾丸は弾け、非常に粘着性の高い液体が付着し、何とも言えない匂いを発する。

もう一撃入れようとラスティは骨刀を振ろうとするが、それを黙って受けるイヤンクックではない。

眼前のラスティに、嘴の鉄槌が連続で襲い掛かる。

だが、ラスティは寸での所でサイドロールで回避する。

その時イリヤは目に止まらぬ速さで通常弾L.V. 1を装填し、ラス



ティに当たらぬよう気をつけながら、イヤンクックの胴体を狙い撃つ。

一切の無駄が無いその動きは、まさにプロのガンナーである。

ラストイも負けじと、上段からの踏み込み斬りを翼に叩き込む。続けて斬り上げる。

だがやはり完全に刃は通らず、桃色の鱗を数枚千切るだけ。大したダメージには至らない。

もう一撃、と骨刀を振り上げた所で、イヤンクックは足を軸に回転を始め、尻尾をムチの如くしならせてラストイへ襲い掛かった。

「うおッ!? 危ねッ!」

しかし間一髪、ラストイは上体を捻ってギリギリ回避した。そしてバックステップして、一端距離を取る。

（さすがは飛竜、何もかも桁ハズレだ…。

こりゃイリヤの言う通りやった方がいいかもな……）

ラストイはイヤンクック——“飛竜”を相手に戸惑っていた。

今回の相手は、今まで相手にしてきたドスランポスやファンゴとは全く異なる。

人間を軽く凌駕する巨体に、強固な鱗を持ち、巨大な翼を持つ“竜”が相手なのだ。

正確にはイャンクックはランポスと同じ鳥竜種にカテゴライズされるが、その生態は飛竜種に酷似している。

つまりラスティにとっては初の飛竜戦、とも言えるのだ。

にも拘わらず、何も考えず突撃するのがラスティ・シューマッハという人間なのだが。

一方、イリヤは…

（初めてのイャンクックに突っ込める勇気は認めるけど……危なっかしいわね）

少し離れた地点で通常弾Lv. 1を撃ちながら、再び斬り掛かるラスティに、イリヤは内心そわそわしていた。

大型モンスターを狩るならば、最初から積極的に打って出るのではなく、まずは動きを見極めるのが常だ。

敵の行動を把握もせずに突貫するなど、自殺行為に等しい。

それを分かっていて最初から突撃を指示するイリヤも、なかなかスパルタなものだが。

当初は貫通弾を用いて一気に勝負を決めるつもりだったが、先程のラスティとランポスのやり取りを見て、やめた。

ラスティなら、初見でもイャンクックと渡り合える。そう思えたからだ。

事実、ラスティは今も一撃も当たらず、攻撃を避け続けている。

加えて、ラスティは避けた後は必ず一太刀入れている為、イャンクックには徐々にだが、ダメージが蓄積してきている。

最初こそむやみやたらに攻撃してはギリギリ避ける、という状況だったが、今では完全にイャンクックが翻弄されている。

突進、嘴の連続突き、尻尾の回転攻撃、更には嘴から吐き出される火炎液、それら全ての攻撃を見極め、コースを予測し、避ける。そして斬る。

この繰り返し。

交戦してからまだ五分も経っていないというのに、ラスティはイャンクックを“攻略”していた。

そうして暫く手玉に取られていたイャンクックだったが、突如ラスティから顔を背けた。

そして離れた位置から自らを狙撃している五月蠅い障害——イリヤへと体を向けた。

対象と大きく距離が空いている場合、イャンクックが執る行動は1つしかない。

軽く足踏みし、イャンクックは全速力で走り出し、イリヤへ真っ正面からの突進を敢行する。

人間くらいならひと飲み出来そうな嘴を大きく開けて、イリヤへ桃色の巨駆が迫る。

それに対し、イリヤは無言のまま瞬時に別の弾丸を装填。

さらに腰だめの射撃体勢から、片膝をついて、ヴァルキリーファイアのストックを肩に当て狙撃体勢に移行。

眼帯を付けてない左目で肩越しにスコープを覗き、レティクルをイャンクックの“ある一点”に合わせた。

「誤差修正……そこッ」

トリガーが弾かれ、放たれた1つの弾丸は見事にイャンクックの頭部に命中し、弾頭が突き刺さった。

しかし一発の小さな弾丸など、イャンクックにとってはダメージの内に入らない。

構わず走り続け、イリヤに肉迫するイャンクックはガバッと大きな嘴を開けた。

その瞬間――頭に刺さっていた弾頭が、爆発した。

――ドオンッ！

「クアアッ!？」

焼けつく炎熱が、直接頭蓋を襲う。

凄まじい振動が、脳を揺さぶる。

予想外の重い衝撃に堪らずイャンクックは足を踏み外し、巨体を滑らし盛大に横転した。

徹甲榴弾。

イャンクックの頭を襲ったこの弾丸は、目標に着弾した後爆発するという特殊な弾丸である。

ボウガンが扱える弾丸の中ではかなり高い威力を有しており、頭部に撃ち続けられれば強力なモンスター相手でも脳震盪を起こせるという、非常に強力な弾丸だ。

しかし、強力な故に大口径な弾丸の為、コッキングレバーが自然と

重くなり装填に時間が掛かり、一度に装填出来る数も少なく、所持可能な弾数も非常に少ない事が難点である。

ちなみに、イリヤが撃った弾はそのLv・2。

Lv・1を上回る威力ならば、驚愕したイャンクックが転倒するのも当然だろう。

桃色の鳥竜は草原の草という草を千切りながら、漸く止まった。

すぐに起き上がろうともがくが、視線を上げたイャンクックは戦慄した。

目の前には銀髪隻眼の銃士――ガンスリンガーイリヤ・ブロウニングが、銃口を突き付けながら、自らを見下ろしていたのだから。

逆光のせいでその表情はよく分からない。

それが余計に恐怖を駆り立てる。

ヴァルキリーファイアに装備されているロングバレルが、妖しく日光を反射した。

「Are you ready? (覚悟はいいかしら?)」

鱗布越しからは見えないが、イリヤが不敵に笑ったように感じた。そして静かにトリガーに掛けた指を、引き絞った。

――ドオンッ！

「クアッ!？」

通常弾や貫通弾とは違う太い銃声が響き、ゼロ距離で徹甲榴弾Lv.2が再び襲い掛かる。

一発しか装填出来ない為、すぐにコッキングレバーを引き、廃棄する。

徹甲榴弾Lv.2を再装填したと同時に、先程撃った徹甲榴弾が爆発した。

そして間髪入れず、再び徹甲榴弾を撃つ。

爆風の余波がイリヤの銀髪を揺らす度に、重厚な弾丸が容赦なく撃ち込まれる。

何度も。

何度も。

事務的に、ただひたすら目標を撃ち続ける。

しかし、これだけで終わりではなかった。

「スクリーミング・ショウはこれからだぜッ!!」

イリヤの猛攻に拍車を掛けるかのように、イャンクックに追いついたラストイが刃を振るう。

前方からは弾丸と爆炎の波状攻撃。

後方からは力強い斬撃の嵐。

イャンクックは立ち上がろうと必死に抗うが、前後から怒濤の攻撃

を受けてもがき苦しむ。

この様相はまさしく、阿鼻叫喚スクリーミング・シヨウの宴そのものである。

「イャンクックが立つわよ！  
下がって！」

しかし、そんな状況は長くは続かない。

攻撃に晒されながらもなんとか持ち直し、立ち上がるイャンクックから二人は一旦距離を取る。

よろよろと立ち上がるイャンクックには、先程までの威厳に満ちた面影は欠片も無かった。

大きな嘴には亀裂が走り、特徴的な耳は無惨に焼け千切れ、身体の鱗は所々血が滲んでいる。

立っているのがやっと、という訳ではないが既に満身創痍に近かった。

イャンクックの背後に位置するラスティは早速斬り掛かろうとする。だがその刃がイャンクックに触れると思われた瞬間、空を切った。

「クッ、飛んだ！？」

イャンクックは自身の翼を羽ばたかせ、上空へ飛び上がったのだ。さらに巨体が浮き上がる程の力で羽ばたいたそれは、強烈な風圧を生む。

間近にいたラスティは危うく吹き飛ばされそうになるが、足に力を入れてなんとか踏み留まった。

さらに高度を上げたイヤンクックは、踵を返すようにその場から飛び去って行った。

その様子を見てラスティはふうとため息を吐き、安堵の表情を浮かべる。

「逃げた、か……。」

「いやアスリル満点だったな」

「スリルって……、狩りは遊びじゃないのよ」

相変わらずマイペースなコメントを言うラスティにイリヤが注意する。

分かってるよ、と言いながらラスティはどかりと胡座あぐらをかき、ポーチから支給品の携帯砥石を取り出して骨刀を研ぎ始めた。

太刀や大剣、ハンマー等の接近戦武器は攻撃していく内に徐々に磨耗していき、挙げ句には刃こぼれも起こしてしまう。

それを防止する為、こういった小まめな武器の研磨が大切なのだ。

砥石は剣士の命と言っても過言ではない。

「どうせやるなら楽しまなきゃ損だろ？」

お前もカッコつけて“Are you ready?”とか言っ



てたじゃねエか」

「え！？」

き、聞こえてたのッ！？」

ニヤニヤとからかうラスティに、顔をボンツと真っ赤にして珍しくイリヤは声を荒げる。

「あ、あれはちちち違うのよ！？」

そうッ、き、気合いよッ！気合い！！

自分に気合い入れただけなんだからッ！

か、勘違いしないでよッ！！」

余程恥ずかしかったのだらうイリヤは呂律が回らなくなるぐらい慌てるも、なんとか誤魔化そうと奮闘する。

まあ真っ赤に染まった顔で言われても説得力が無いのだが。

骨刀を研ぎ終えたラスティは、ニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「そうカリカリすんなよ。

誰だってテンション上がる時あるしよ。

さつきはキマってたぜ、イリヤ？」

「だから違うって言ってんでしょーッ！！」

普段のクールさは何処へやら、更に顔を赤くして怒るイリヤ。もう完全にラスティのペースに吞まれている。

イリヤはクールでプライドの高い性格だ。それ故にこういった事には慣れておらず、どうも素直になれないらしい。

ラスティは思った。

からかえばミレーヌより面白い、と。

「もうッ、準備が出来たならさっさと行くわよ！」

「ハイハイ。」

あれ、イャンクツクの居場所分かんのか？」

「ペイント弾の匂いを辿れば分かるわよ！」

「あ、そうだったな」

これ以上からかわれては堪らない。

イリヤは逃げるようにズンズン歩いて行き、その後ろをラスティがニヤニヤしながらついて行く。

（……調子が狂うわね。

何なのよ、もう……ッ！）

イリヤは1人心の中で愚痴った。

## Act..7\ Screaming or shaming【スクリーミング・

初見でイャンクックを手玉に取る主人公に、ゼロ距離で徹甲榴弾を連射するヒロイン。

こんなモンハン小説でいいのだろうか？

お気づきかと思いますが、イリヤはツンデレですw

今回はそれを書きたかったんですww

イャンクックとの戦闘なんてオマケです（爆）

次回もイャンクックと戦いますが、ただ戦うだけじゃ面白くありませんからね。少しイベントも入れたいと思います。

それでは（＾Ｏ＾）／

## Act..8\Awakening the sonic【覚醒する音速】（前編）

続けてイヤンクツク戦です。  
どうぞッ！

## Act..8\Awakeing the sonic【覚醒する音速】

ラストイもイリヤについて行きながら、ペイント弾の匂いを確認する。

ペイントの匂いが若干濃く、どうやらイヤンクックは近くのエリアに逃げ込んだようだ。

「あんま遠くには行ってねエみてーだな」

先を歩くイリヤに何気なく声を掛ける。

しかしイリヤはまるで聞こえていない風に先を歩いて行く。

（ダメだ、拗ねちまった）

やれやれと呟き、頭をガシガシ掻くラストイ。

恐らく反省はしているが、後悔はしていないだろう。

そうしてエリア間を結ぶ細道を歩いていると、開けた場所に出た。

ウステイオ森丘エリア4

エリア3に隣接したエリアで、細い坂道を登った先にある。

入り口付近に大きな岩石が突き出しているが、それを越えると障害物も高低差も無い、非常に戦い易い場所となっている。

オマケにこのエリア4、飛竜の巣であるエリア5とも隣接している

為、モンスターは殆んどいない。  
わざわざ飛竜の縄張りに入り、餌になりたがるモンスターはいないのだ。

まさに、自然が生み出した決闘場コロシアムと言えよう。

そして、そこに“奴”は居た。

「クエエ……」

広場の中央に佇む桃色の飛竜、イヤンクツク。  
弱々しく呻くそれは、もう見るに耐えない状態だ。

身体中の鱗や甲殻は傷つき血は流れ、大きな耳は焼け千切れ、大きな嘴は亀裂が入っている。

特に、多量の徹甲榴弾を受けた頭部はかなり黒ずんでいた。

ラストイとイリヤは岩影に隠れて、イヤンクツクの様子を伺う。

「だいぶ弱ってんな。」

このまま一気にケリつけちまおうぜ」

「ええ、でも油断しないで。」

まだ耳を畳んでいないから、十分戦える力を残している筈よ」

普段の冷静さを取り戻したイリヤはラスティの進言に頷きつつ、イヤンクックを分析する。

たいていの大型モンスターには、瀕死状態に陥った時のサインが存在する。

足を引き摺る等それらのサインは様々だが、イヤンクックの場合耳を畳めば弱っている事が分かるのだ。

「イヤンクックが背を向けた時に出るわよ。  
タイミングを私に合わせて」

「オーケー。  
女にエスコートされるのも悪くねェな」

「……茶化さないで」

毎度ながら、ラスティの軽口に溜め息を吐くイリヤ。

この男の相手はイヤンクックより疲れると、割りと本気で思った。

そんな二人を他所にイヤンクックはゆっくりと彼らに背を向けると、のそのそと歩き出した。

「行くわよ!」

「レッツロックだ!」



瞬間、二人のハンターが岩影から飛び出した。

イヤンクックが千切れた耳がピクリと反応し、異変を確かめるべく後ろに振り返る。

そして背後に顔を向けた瞬間、白く細長いモノ——ラスティの骨刀が目前に迫っていた。

「喰らいなッ！」

走った勢いをそのまま骨刀に乗せ、ラスティは豪快に振り下ろす。無骨でしなやかな刀身がイヤンクックの頭部に叩きつけられ、ブシヤッと鮮血が飛び散った。

「クエエッ!？」

いきなりの奇襲にイヤンクックは仰け反ってしまい、悲鳴と困惑の声を上げる。

それを見たラスティはニヤリと不敵に笑い、ある確信を抱く。

（やっぱり、頭はイリヤの徹甲榴弾でズタボロだ！  
イけるぜッ！）

先ほど集中砲火を受けた頭部は、もはや防御力は皆無。  
イヤンクックが怯んだ隙を突き、再び骨刀を振るう。

ラストイの刃がイャンクツクの頭部を捉える度に、血が飛び散り草原を赤く染める。

同時に、岩山を背に離れた地点から狙撃するイリヤの弾丸が襲い掛かる。

今度は通常弾Lv. 1ではなく、貫通弾Lv. 2である。

放たれるその細く尖った弾丸は、吸い込まれるように全てイャンクツクの体に命中し、甲殻を穿ち肉を抉る。

しかしそれは長く続かず、イャンクツクはすぐに気を持ち直した。それを察知したラストイは一旦攻撃を止め、バックステップして距離を取った。

反撃に備え、骨刀を構え直すラストイ。

(……何だ? 仕掛けてこねェ?)

だがイャンクツクからの反撃が無い。

何やら尻尾を震わせ、右足で地面を引っ掻き、低い声で唸っている。ゆっくりと開いたボロボロの嘴から、吐息のように火炎液が漏れ出していた。

「ラストイ! それは“興奮状態”になる兆候よ! 注意して!」

後方のイリヤが声を上げる。

イヤンクックのような大型モンスターは、怒りに我を忘れ興奮状態になることでパワーやスピードが大幅に強くなる。

己に掛かる負担や反動を無視し、意識を全てを攻撃へと特化させるのだ。

ラストイも話には聞いていたが、実際に興奮状態のモンスターを相手するのは初めてである。

イヤンクックの動きを警戒しつつ、骨刀を構えながら冷静に二、三歩下がる。

やがてイヤンクックは今度こそラストイに向き直った。

一瞬、ラストイとイヤンクックの目が合う。

まさにその一瞬、イヤンクックはラストイに飛び掛かっていた。

——今までとは比べ物にならない早さで。

「ッ!？」

予想以上の早さに驚いたラストイは、一瞬反応が遅れてしまった。それでも十分に距離を取っていた為、寸での所で右にローリングして回避出来た。

勢いよく振り降ろされた嘴はラストイを捉えることなく、ズシンと重い音を響かせ地面に叩きつけられる。

(早すぎんだろ…ッ!)

ラストイの額から冷たい汗が流れた。

紙一重だった。

あの巨大な嘴、それも興奮状態で威力が上乘せされた一撃を受けたらひとたまりもないだろう。

怯まず攻撃に転じようとするラスティだが、怒り狂うイャンクックはそれを許さない。

イャンクックは嘴を叩きつけようとラスティへ振り降ろし続ける。

時には噛みつきも交え、回り込まれた際には尻尾を振り回す。

その間にも貫通弾を撃たれているにも拘わらず、イャンクックは執拗にラスティを狙い続ける。

怒りに任せた、息をつかせぬ連続攻撃。

完膚なきまで叩き潰す、そんな思念がイャンクックから伝わって来るようだった。

（クソツタレ！ 避けるだけで精一杯だ！）

イャンクックの猛攻を何とか避けながら、次第にラスティの心は焦燥感に支配されていく。

やがて冷静さを失ったラスティは、一瞬だけ隙が生まれてしまった。

狩りでは、その一瞬の隙さえ命取りとなる。

気づいた時にはもう遅かった。

ラスティの眼前には、桃色の尻尾が迫っていたのだから。

——バシィッ!!

「がッ……!?!」

イヤンクツクの尻尾が、ヘルムを被っていない無防備なラスティの頭に直撃した。

ラスティは吹っ飛ばされ宙を舞い、受け身もとれず無様に地面を転がる。

更に運の悪い事に、ラスティの転がる先には岩山が立っていた。

当然急停止など出来る訳もなく、勢いよく背中から岩山にぶつかった。

「がは…ア…ッ!!」

肺の中の空気が一気に吐き出され、苦悶の声を上げる。

同時に、全身に激しい鈍痛が駆け巡る。

防御力の低いランポスシリーズという事も災いした。

尻尾の一撃よりも岩山に叩きつけられたダメージが大きく、ラスティは岩を背にぐったりと沈んでしまった。

「ラスティッ!!」

「やべエな……モロ入った……」

イリヤが悲痛に叫ぶ。

尻尾の一撃で頭が切れたらしく、ラスティの頭から血が止めどなく流れだす。

視界の右半分は、もう赤くなっていた。

1人片付けた事を確認したイャンクックは、今度はイリヤへと向いた。

そして全速力で突撃する。

興奮状態の為、いつもより速い。

しかし距離が離れている分、回避は出来る。

イリヤは冷静に意識をラスティからイャンクックへ移し、横へ平行に走る。

このまま走れば避けられる。

その後ラスティに回復弾を撃てばいい。

ヴァルキリーファイアを握る手に、自然と力が入る。

だが、それは唐突に起きた。

突然、右足から力が抜けてがくんと倒れるイリヤ。

「痛ッ…!」

僅かに痛みを覚え、右足を見る。

どうやら軽く捻ってしまったようだ。

その間にもイヤンクックは迫って来る。

もう立ち上がって回避は間に合わない程、距離は近い。

イリヤの纏う強固なレイアシリーズなら、イヤンクックの突撃を耐えきる事は出来るだろう。

だが、イリヤは今まで岩山を背にして安定した狙撃をしていたのだ。

前方からはイヤンクック。

背後には岩山。

それらから導かれる結論は1つ。

――圧死。

「い、嫌あ――ッ!!!!」

迫り来るから背けるかのように、ぎゅっと目を瞑る。

イリヤの悲鳴がウスティオ森丘に響き渡った。

避けられない死に、もはや為す術は無い。

「――このうっかり屋さんめ」

不意に聞こえた、男の声。

イリヤがハッとしたのも束の間、何かに包まれるような感覚を覚え

た。

同時に浮遊感も。

視界には横へと流れていくイヤンクツクと、風に靡く赤いウェーブ掛かった髪の毛が映っていた。

浮遊感はずぐに終わり、地面に落下した衝撃が襲う。

だが衝撃だけで、ダメージは無かった。

恐る恐るイリヤは目を開けた。

「ま、欠点の一つや二つあった方が面白いしな」

目の前には、頭から血を流しながらも軽口を叩くラスティがいた。

ラスティはあの場から走って動けないイリヤを抱え込み、ギリギリの所で横に飛ぶように回避したのだ。

落下の衝撃があったのもこの為である。

「ラスティ……」

「立てるか？」

「う、うん……」

「オーケイ、じゃあ岩山に隠れてな。」



後は俺がやる」

ラストイはイリヤの手を取って立ち上がらせると、イヤンクックを見据えながら指示する。

見ればイヤンクックは、岩山に勢いよくぶつかって悶絶している所だった。

いくら興奮状態でも、岩山にダイブは堪えたのだろう。

後は俺がやる、このラストイの発言にイリヤは異を唱えた。

「1人で!？」

無茶よッ! そんな傷だらけ——」

「無茶じゃねエよ」

ラストイに突如遮られ、イリヤは言葉に詰まった。

ラストイは道具袋<sup>ポーチ</sup>から回復薬を1つ取り出して一気に飲み干し、無造作にそのビンを投げ捨てた。

「向こうが本気なら——」

言いながら、ラストイは目を閉じる。

「こつちも本氣<sup>マジ</sup>になりやいいのさ、これがなッ!!」

そして力強く目を開いた。

その眼孔は鋭く、殺氣がビリビリと伝わって来る。

普段のふざけた感じは、何処かへ消え去ってしまったと錯覚するほど。

ラスティの発する壮絶なプレッシャーに、味方のイリヤでさえ鳥肌が立ち、恐怖した。

更に驚く事に、ラスティの身体から赤いオーラに似たものが滲み出していた。

（これは……練氣!?）

その赤いオーラを、イリヤは知っている。

練氣放出。

太刀使いでしか行使出来ない、一種の身体強化の技。

敵を絶え間なく斬り続けて、身体に蓄積される練氣が限界量に達すると身体から溢れ始めるのだ。

先程の赤いオーラがまさにそれである。

だがラスティの場合、練氣放出を“任意”で発動したのだ。

最初に戦った時は避けながらも斬り続けていた為、練氣は充分限界量までストックされていた。

しかし、通常は限界量に達した時点で練気放出が発動する。それをセーブし、任意で発動する事はプロの太刀使いでも難しいのだ。

だがこの男――ラスティは平然とそれをやってみせた。イャンクックすら狩った事の無いこの男が。

（ラスティ……。

本当に、何者なの……ッ!？）

イリヤはただ啞然とするしかなかった。

イリヤとしても、任意の練気放出という太刀使いの奥義を初めて目の当たりにしたのだから。

痛みに悶えていたイャンクックが、漸く立ち上がる。

そしてしつこく邪魔立てする敵、ラスティを睨み付けた。

ラスティもそれに答えるように、背中の骨刀に手を掛け、ゆっくりと鞘から引き抜いた。

「さア、ケリつけようぜッ!!」

ラスティとイャンクックは、同時に駆け出した。

桃色の飛竜は、ただ己が敵を殲滅する為に。

音速の狩人は、一振りの太刀にて標的を斬り伏せる為に。

音速の狩人は、不敵な笑みを浮かべた。

任意の練気放出については、オリジナルに考えてみました。  
太刀も双剣みたいに出来るんじゃないか？と思いついてw  
しかし、これは事前に練気を溜めておかないと出来ません。

劇的に強くなる、という訳でもありません。

あくまでゲームのような練気放出を、好きなタイミングで出来るだけです。

この小説はスタイリッシュを目指していますが、チートではありません。  
せん。

なのでラストイも攻撃を喰らうし、あんな不幸な目に遇います（爆）  
練気放出は出来ても、実力が伴って無いんです。

そして読者の方々、お分かりでしょうか？

この小説、所々に某スタイリッシュクレイジーアクションゲームの  
ネタが“稀によく”出てきます（爆）

ハイ、自分が好きなだけですスイマセンm（　　）m

次回はイヤンクック編最終話！……になるといいなあ。

感想、ご意見は随時受け付けています。

よろしくお願いします。

## Act.: 9 \ Speed of sound【音速の世界】 \ (前書き)

こんにちは、スノーマンです。

本当は昨日の時点で更新できたのですが、ちょっとしたトラブルがありました。

余計に時間を食ってしまいましたm ( \_ \_ ) m

それではイヤクツク編最終話、Let's Rockです(爆)

## Act.: 9 \ Speed of sound【音速の世界】

「さア…ケリつけようぜッ！」

骨刀を抜き、ラスティは正面からイャンクックへ駆け出す。  
イャンクックもそれに応じるように、正面から突撃を始める。

お互いの距離は瞬く間に狭まっていく。  
このまま行けば真っ正面からぶつかり合うだろう。

人間とイャンクックの正面衝突。

その結果は、言わずとも分かる。

しかしラスティは避ける素振りも見せず、突き進む。  
その顔に不敵な笑みを浮かべながら。

やがてお互いの距離がゼロとなろうとした瞬間——ラスティが、  
跳んだ。

練気放出による身体強化もあり、ラスティは人間1人分高くジャンプした。

しかし、それだけでは巨大なイャンクックを飛び越える事は出来ない。

——だから、“踏み台”にした。

「ふッ！」

ラストイは軽快に、イャンクツクの頭を踏みつけた。

それを足掛かりに、再び跳ぶ。

イャンクツクの頭をまるで踏み台のように用い、ラストイは本当に飛び越えたのだ。

そして空中で宙返りし、イャンクツクの背後に無事着地する。

まさか自分を踏み台にするとは思ってもいなかったイャンクツクは、突如も目標を見失い、地面に倒れ込むように停止する。

しかし、どの飛竜にも共通して地面に倒れ込むというブレーキを行った場合、そこから起き上がり攻撃体勢に移るまで大きな隙が生まれる。

勿論、ラストイはその隙を見逃さない。

すぐに追いかける。

そしてイャンクツクまで後3メートルとなったその時、左手を前に突きだし、骨刀を握る右手を引き絞るといった刺突の構えをとった。同時に3メートルもある距離を、一足のステップだけで渡りきる。それはまるで地面を滑るかのようにキレがよく、速い。

そして地面を滑っている間、瞬時に骨刀に練気が収束する。

練気のコーティングが施された刃は殺傷力が増し、切れ味さえ底上げする。

眼前に移るは、無防備なイャンクツクの背。

足に全体重を乗せて踏み込み、引き絞った刃を勢いと共に——ブチ込んだ。



「でいいいやアッ!!」

さながら、スティンガー蠍の一刺しの如く。

自身の筋力、助走の速度、身体の本ネ、あらゆる全てをフルに使った渾身の突きは——“気付けば”イヤンクックに深々と刺さっていた。

「おらおらおらアッ!!」

そこからラスティは怒濤の連撃を開始する。

イヤンクックに叩き込まれる斬撃は全て“気刃斬り”。

練気を刃に纏わせて攻撃する事で、その威力は通常より高くなる。

反面、気刃斬りは練気の消耗が激しい。

だが練気の消耗など、今は些細な問題でしかない。

ラスティは練気を大量にストックしていたのだから。

ラスティの猛攻を岩影から見守るイリヤ。

しかし何故だろう、今のイリヤの顔には、この日一番の驚愕に染まっていた。

「嘘…?」

「冗談でしょ……?」

絞り出すように、今日の前で起きた事をありのまま呟いた。

「何で……ラスティの斬撃が“見えない”の……？」

見えない。

その表現は間違っていない。

しかし付け加えるなら、こう言うべきだろう。

——ラスティの斬撃が、“速すぎて見えない”——

まだまだ力任せで荒削りな太刀筋。

だがその一振り一振りが、不可視の速度で暴れ回る。

限りなく大胆に。  
アグレッシブ  
スマート

しかしどこか繊細に

太刀が振るわれる“音”

肉が斬り裂かれる“音”

鮮血を撒き散らす“音”

それに“視”は無く、“音”だけの世界。  
ダンスマカブル

“音”を越える速度で蹂躞する死の舞踏

“音速”の狩人——ラスティ・シューマツハが牙を剥いた。

「クエエエ……ッ！」

音速の猛攻に晒されながらも、必死の思いでイヤンクックは立ち上がる。

もう全身は見るに耐えない、ボロ雑巾のような状態。耳も畳んでおり、瀕死なのだと確認出来る。

背後に振り返り、ラスティを正面に捉えようとするが——イヤンクックはすぐに後悔する事となった。

振り返ったイヤンクックの目と鼻の先に、骨刀を肩に担ぎ、未だ赤い練気を纏ったラスティが不敵に笑っていたのだから。

「俺を本<sup>マシ</sup>気にさせたのは……ミステイクだったな」

ラスティは更にニタアと凶悪に笑う。

ゾクリ、とイヤンクックの体中に悪寒が走った。

己の本能が激しく警<sup>レッドアラート</sup>鐘を響かせる。

この男は危険だ、と。

戦意を失い、恐怖に支配されたイヤンクックは堪らず空へと飛翔するべく翼をはためかせた。

逃げなければ。

この男から、一刻も速く。  
翼膜が所々破けていようが、構わず必死でイャンクックは空へと飛翔した。

翼によって生まれた風圧を、ラスティは後方に宙返りして回避する。重い装備でこんな軽やかな動きが出来るのも、やはり練気放出の身体強化のおかげだろう。

ラスティは上空へ翔んだイャンクックを一瞥する。

イャンクックは余程急いでいるのか、もう骨刀の攻撃範囲外まで上昇している。

岩影からイリヤが撃ってくれているが、すぐにイャンクックはエリア外へ離脱するだろう。

だが、黙って見逃すつもりは無い。

ラスティは肩に担いだ骨刀を逆手に持ち替え、上昇し続けるイャンクックを見据えた。

「鴨撃ちだぜ。

いや、投げか？」

そして骨刀をイャンクックに向かってブン投げた——！

——ザクッ！

「クエエエッ!？」

投げた骨刀は見事、イヤンクツクの首に刺さる。

これには堪らずイヤンクツクは落下し、派手に地面とキスを果たした。

「どうした、もうオネンネか？」

軽口を叩きながら、緩慢な足取りでイヤンクツクへ歩み寄るラストエイ。

ゆっくりと近づく様が、余計に恐怖心を煽る。

もうイヤンクツクは死ぬ一步手前の状態だ。

立ち上がる力も残っておらず、死ぬのは時間の問題だろう。

近づくラストエイを見つめながら、苦しそうに呻くイヤンクツク。

やがてラストエイはイヤンクツクの前に来ると、首に刺さった骨刀を無造作に抜いた。

刺さった箇所からはブシャツと、血が滝のように溢れ出す。

もうイヤンクツクには悲鳴を上げる事も出来なかった。

ラストエイの眼下に、倒れ伏しているイヤンクツク。

遅かれ早かれ、イヤンクツクは確実に死ぬだろう。

それはもう避けられない。

ならばせめて―――苦しまず殺してやる。

苦し気に呻くイャンクックを見下ろし、静かに骨刀を振り被る。  
そして赤い練気が頭上に振り被った骨刀に収束していく。  
いままでより濃密に、刀身はより赤い輝きを放ちながら。

「Time to live forever, baby（永遠を  
生きな、ベイビー）」

——ザンッ！

言葉を送り、骨刀をイャンクックの脳天へ突き刺した。

呻き声が止まる。

辺りが静寂に包まれる。

さっきまでの戦闘が嘘のように。

イャンクックは、ピクリとも動かない。

ラスティの一撃により、苦しまず、一瞬で、死を遂げた。

ラスティ達の狩りは、無事成功した瞬間だった。

「ふう、終わった終わった」

ラスティは大きくため息を吐き、同時に練気も霧のように霧散して  
いく。

戦いが終わり気が抜けた為か、どっと身体中に疲労感が押し寄せ、その場にへたりこんでしまう。

「……凄いわね、ラストイ。

ダメージを与えていたとは言え、一瞬でイャンクックを倒すなんて」

イャンクックの死を確認し、イリヤも傍に歩み寄る。

「俺が本気だせば、ざっとこんなもんさ」

「何言ってるのよ。

興奮状態になった瞬間、手も足も出なかったじゃない」

「あれま、イリヤ教官は厳しいねエ……」

苦笑して返しながらラストイは立ち上がり、イャンクックから骨刀を抜いて鞘に納める。

そして腰の剥ぎ取りナイフを取り出した。

「さて、いただくとしますか」

頭部は剥ぎ取れる部位が無いくらいボロボロな為、ラストイは胴体の剥ぎ取りに取り掛かる。

暫くラスティの剥ぎ取り作業を黙って見つめていたイリヤだが、不意に口を開いた。

「……ラスティ。」

一つ、いいかしら？」

「ん、何だ？」

「任意の練気放出は誰から教わったの？」

任意の練気放出を使いこなせるハンターは、この世で両手の指に収まるぐらいの数しかない。

それほど練気放出を任意に発動させるのは難しいのだ。

だから新米であるラスティルーキーが出来るといふ事は、それを指南した師がいる筈。

深い意味は無い。

イリヤは純粹に、ラスティの師が気になったただけだ。

ラスティは少し驚いたようにイリヤを見たが、すぐにまた剥ぎ取り作業に戻り、そのまま返事をした。

「親父からさ」

「お父さん？」



ラストィのお父さんもハンターだったの？」

「ああ、そうだぜ」

ラストィの返事に、イリヤは思案する。

任意の練気放出が出来る程の凄腕ハンターなら、同じハンターとして絶対に耳にしている筈である。

だが、シューマツハというファミリーネームは聞いた事がない。

……いや、よそう。

そう思い、イリヤは考えるのをやめた。

饒舌なラストィが自分の父の話題になったにも拘わらず、多くを語らないのだ。

何か事情があるのだろうか？

ハンターである父を亡くし、息子がその後を継ぐというケースもある。

ラストィも、その類なのだろうか？

イリヤの中で憶測が飛び交うが、他人の過去を必要以上に詮索するのは誉められたものではない。

「こんなもんだな。

よし、帰るか」

ラストィは充分イェンクックから素材を剥ぎ取ったようで、剥ぎ取

りナイフを腰にしまうと、“何故かイリヤの元まで近づいてきた”。

「よっこらせっと」

「え………」?

そして右腕でイリヤの肩を抱き、左腕でイリヤの両足を持ち上げる。

所謂——お姫様抱っこ、である。

急な展開にイリヤは呆けた声を出す、自分が置かれた状況が分かってくる、みるみる内に顔が赤くなっていく。

「ちょッ、らららラスティッ!?

い、いきなり何してんのよッ!??」

「ギャースカ暴れんなって。

お前さっき左足引き摺ってたろ?」

「それはッ、……そうだけど……」

ラスティは先程イリヤが歩いて来た時、捻った左足を僅かに引き摺っていたのを見逃していなかった。

お姫様抱っこはラスティなりの気遣いなのだ。

おかげでイリヤは恥ずかしくて真っ赤に沸騰しているが。

だがイリヤ本人は嫌がってる風には見えず、満更ではない様子である。

「とりあえずケガ人は大人しくしてろ、な？」

「分かったわよ……」

もう、自分だって頭ケガしてるクセに……」

「おう、正直マジ痛ェ♪」

ケタケタと笑うラスティに、イリヤは置き場の無い両手をもじもじさせるしかなかった。

とにかく恥ずかしい、いつそ殺して欲しいくらいに。

ラスティはイリヤを担いだまま、ベースキャンプへ歩き出す。

途中——不意に、黙っていたイリヤが口を開いた。

“あの時”の礼を言う為に。

「ラスティ……」

「ん？」

「あの時、イヤンクックから守ってくれて……あ、ありがとう……」

これがイリヤの精一杯。

やはりまだ恥ずかしくて、目を合わせられないが。

そんなイリヤにラスティは“不敵な”笑みを浮かべた。

「気にすんな、助け合うのが仲間ってもんだろ？  
それが可愛い女なら尚更な♪」

「かッ、かわ……ッ!？」

イリヤ、再びボンツと沸騰。

「ひ、人が真剣に言ってるのにッ！  
もう、バカアッ!!」

「ちょ、ストップストップ！  
頭に響くって……!!」

「知らないわよッ！  
バカバカバカアッ!!」

この男には敵わない、色んな意味で。  
割りと本気で思うイリヤだった。

## Act.: 9 \ Speed of sound【音速の世界】 \ (後書き)

というわけで、ハンティングとコメディ(?)のダブルパンチでお送りしました。

まあ……やってしまったとしか言えません(一・一;) )

任意の練気放出からもうあり得ないのに、音速の気刃斬りって……ぶっちゃけ、ラスティの事を音速音速言ってたのは、これがやりたかっただけなんです(爆)

コメディパートは……やりすぎました(爆)

正直、作者がイリヤというキャラを見失って来つつあります。確かクールキャラだよね……?

それでは、また次話にて会いましょう!

次回、“親父”登場。

**A c t . 1 0** **↳ S p a r d a** **【紅の男】** **↳ (前書き)**

すいませんッ！

今回は短いです！

駄文な上に短いです！

## Act..10 (Sparta) 【紅の男】

首都ドンドルマ・中央酒場。

日も暮れ掛かった夕方のラッシュアワー真っ只中、今日も騒々しく賑やかである。

勝利の美酒に酔うハンター達、敗北のヤケ酒を煽るハンター達、クエスト出発前の一杯に洒落込むハンター達、それらは様々だ。

そんな中、一つのテーブルに向かい合って昼食をとる、若い男女のハンターが二人。

「かんぱあい!!」

「乾杯」

ラストイとイリヤである。

ラストイはビールの入ったジョッキを、イリヤは赤ワインの入ったグラスを、互いにキンツとぶつける。

ラストイはビールをジョッキ一杯丸々「ぷはー!」と満足げに飲み干す。

「ちょっと、泡付いてるわよ」

「お、悪イ悪イ。

すいませーん、もう一杯!」

ワインを一口飲んだイリヤは、ついでにラスティの口周りの“白髭”を注意する。

ラスティは指で“白髭”を拭き取り、さらにビールをウェイトレスに注いで貰っていた。

ちなみにテーブルに乗っている料理は、イリヤが女王エビとココット米のパエリア、ラスティは猛牛バターチーズピザ（Lサイズ）といった具合だ。

勿論、ピザはオリーブ抜きである。

ドンドルマの酒場のように大きなものとなると、注文出来る料理は三つにランク分けされており、それぞれ下位、上位、G級となっている。

イリヤは上位に位置するハンターなので上位の料理も食べられるが、まだ下位であるラスティは下位の料理しか食べられないのだ。

最初は不満だったラスティだが、ピザを見つけた途端機嫌を直した事は言うまでもない。

ラスティ達はイェンクックを狩り、クエストは無事成功した。

彼らもまた、勝利の美酒という夕食をとっている次第だ。

普通未成年の飲酒は法により禁止されているが、ハンターは例外的に認可されている。

詳しい理由は不明だが、今となってはは気にする人間は誰一人いない。

早い話、気にするな。



「さすが都の料理って感じだな。

ミレーヌの料理もいいけど、此処もうめエなく♪」

「ミレーヌ？」

「ああ、俺の幼なじみなんだ。

コイツがまたからかうと面白い奴だよ」

酒のせいもあるのか、すっかりラスティは上機嫌だ。

それからラスティは遠慮なく幼なじみの面白エピソードを暴露していく。

イリヤもクスクス笑い、何とも穏やかなムードを醸し出している。  
だが……

（何……？）

この感じは……？

ラスティが幼なじみの話をする度に、胸の奥がチクリと痛む。

ミレーヌという自分の知らない女の事を話されると、ラスティに対して、よく分からない感情が心の奥底で芽生えていく。

自分でも分からない。

何故、ラスティに対してなのか？

イリヤは心の中で自問自答を繰り返すが、答えには行き着かない。  
そのもどかしさから、次第に自分に苛立ち初め――

「――だから、次からは絶対にヘルムを被りなさい。  
どれだけ危険かは、イヤンクックと戦って分かったでしょ？」

「モグモグ……まアそうだけだよ、頭になんか被るって慣れなくて  
さ」

いつの間にか、会話は説教へと変わっていた。

勿論、1人で勝手に不機嫌になったイリヤには、そんな事知る由もない。

一切れ目を食べながら、ラスティは二切れ目に手を延ばす。

確かにイリヤの言う通り、頭に何も装備しないのは特に危険だ。  
実際、尻尾の攻撃を頭に受けたラスティは意識が飛びかけたのだ  
今だって頭に包帯を巻いている。

イリヤの説教を嫌々聞きながらも、賑やかに二人の食事は進む。  
久しぶりのまともな料理なのだ、竜車で食うのとは味も質も違う。  
何より大陸首都の料理だ。  
美味しくない訳がない。

――バンツ！

突如、酒場のドアが大きな音を立て、勢いよく開けられた。  
途端に喧騒が止み、酒場を静寂が包み込む。

ついさっきまで盛況だった酒場がシント、一瞬で静かになる。

ラストイとイリヤもその異変を感じ、客のハンター達の目線は“一人の壮年男性”に釘付けにされている事に気づく。

二人はハンター達の目線を追うと、その壮年男性は堂々とした足取りで、入り口から歩みを進めていた。

短くサラサラとした銀髪、身長は190cmはあろう大男。

モデル顔負けに整った顔立ちに少しの顎の無精髭が加わり、大人の渋さを感じさせる。

何より特徴的なのは、その服装。

黒いインナー、裾先だけ赤い黒のズボン、革靴。

そして派手な深紅のラバーコートを羽織っている。

体格と服装から非常に目立つが、防具ではなく私服を着用している辺り、恐らく一般人なのだろう。

だが“銀髪の男”から自然と発せられる気迫に、酒場のハンター達は気圧され、息を呑む。

その様は、銀髪の男を獅子と例えるなら、ハンター達が子犬に見えるてしまう程に。

コツコツという革靴特有の足音と共に、銀髪の男は真っ直ぐカウンターへ歩いて行く。

不意に、ガタツと席を立つ音がした。

ラストイである。

イリヤの制止を無視し、無言で迷いなく銀髪の男へと歩いて行く。

堂々と、正面から。

やがてラスティと銀髪の男は正面からすれ違い——両者はピタリと歩を止めた。

一時の静寂。

まるで凍りついたように、二人が動く気配はない。

殺伐とした空気が張り詰める。

常人なら気絶してしまうだろうその空気に、イリヤは椅子から立ち上がる事すら出来なかった。

ふとその時、とあるテーブルの後片付けをしていたウェイトレスの手から、ワイングラスが滑り落ちた——。

——ガシャンッ！

刹那、二人は動き出した。

互いに素早く振り返り、二人は右ストレートを放つ。  
だが全く同時に放たれた右拳は、お互いの右拳にぶつかり合う。

互いに一步も退かず、拳と拳の鏖競り合いが始まる。

ラスティは歯を食い縛り、自分の右腕に全力を注ぎ込む。

それに対し、銀髪の男は涼しげな表情をしており、苦悶が一切感じられない。

まるで、余裕だと言いたげに。

そして突然、銀髪の男がニヤリと不敵にほくそ笑み、右腕を力強く

振り抜いた。

力負けしたラストィは吹っ飛ばされ、宙を舞う。  
しかし空中で受け身を取り、難なく着地する。

突然の出来事に、酒場の人間全員が哑然とする。

それでもイリヤはいち早く我に帰ると、すぐさまラストィへ駆け寄る。

「ちょっと！

何してるのよラストィッ！？」

イリヤはラストィを諫めるが、当の本人は無視して銀髪の男を睨み付けている。

睨み合いに再び空気が張り詰めると思われたが――――

「ハア……やっぱアンタには敵わねェや」

両手を上げて『参った』のポーズをしたラストィの一言に、一気に空気が瓦解した。

「……………へ？」

これにはイリヤも呆けた声を出してしまう。  
頭に『?』マークを浮かべて思考停止に陥ってしまった彼女を他所に、銀髪の男は初めて口を開いた。

「まだまだケツの青いガキが何言ってやがる。  
十年早えぜ」

「ハッ！」

我ながら甘く見られたもんだ」

憎まれ口を叩き合って笑い合う二人に、イリヤを含め酒場の人間達はさらに困惑する。

それもその筈、今の二人は先程とは打って変わり、まるで昔からの知り合いの様に振る舞っているのだから。

そしてその答えは、次の二人の一言によって明かされる。

「久しぶりだな……親父」

「ああ……久しぶりだな、マイ・サン（息子）」

ニツと笑い合い、二人は再開の挨拶を交わした。

それを見た酒場の人間達は、キョトンと目が点になった。  
啞然を越えて、完全にフリーズ。

「な……な……ッ！」

ワナワナと声も唇も震わせるイリヤ。

そして――

「なんですってエエエエエエエエエエ！！！？？？」

「……何だよイリヤ。」

急にシャウトは心臓に悪いぜ……」

両耳を塞いでラステイはジト目で睨むが、イリヤはそんな事お構い無しにラステイに詰め寄る。

「何だよ、じゃないわよッ！」

まさかあんたのお父さんって、この人なのツ!？」

そう、この銀髪の男こそ一年前にハンターを引退し、ドンドルマ都知事に就任した、“伝説の四英雄”と謳われる者の1人――

「スパーダ・D・レッドグレイヴが、あんたのお父さんなのッ!？」

——そして、ラストイのたった1人の“師”であり、“父”であ

っ  
た。



## Act..10 (Sparada)【紅の男】 (後書き)

やっと出せましたラスティの親父、スパーダ・D・レッドグレイヴ。  
外見、服装、性格ともに某スタイリッシュクレイジーアクションゲ  
ームのオッサンですw  
さらに、イリヤの心に変化が!?

多分暫くは戦闘シーンはありません。  
スパーダのプロフィールや“伝説の四英雄”は次回明らかにします。  
要領悪くてすみません……。

それでは ( ^ o ^ ) /

**Act..11\Fourth legend【伝説の四英雄】\（前書き）**

本つつつ当に申し訳ありません!!

部活にテストに修学旅行に職業体験に、とにかくホント忙しかったんです……。

あ、部活はいつもか……（・ω・）

「そんな更新速度で大丈夫か？」

「大丈夫じゃない、問題だ」

はい、すいませんm（　　）m  
ではどうぞ……

## Act..11\Fourth legend【伝説の四英雄】

「……じゃあ本当に、知事はあなたの父親なのね？」

「だーからさっきからそう言っただろ？」

戦い方も、練気のやり方も、女の口説き方も、全部親父からご教授して貰ったって」

「三つ目は余計よ」

あの後、騒ぎも落ち着いて三人はテーブルに戻っていた。

ラスティの隣にスパード、イリヤはラスティと向かいの席に座っている。

「それにマイ・サンは養子だ。道端でボロ雑巾になってる所を、俺が拾ったのさ。」

だからファミリーネームが違うんだ」

「そ、そういう事情があったんですか……。  
すみません、本当にラスティの父親が知事だとは思ってもよらなかったの……」

「そんな緊張すんなよ、眼帯のお嬢ちゃん。  
もっとリラックスしようぜ？」

「は、はい！」

イリヤが緊張するのは無理もない。

何せ相手は、全世界のハンター達の畏怖の対象である“伝説の四英雄”の1人なのだ。

その英雄がラスティの父親なのだから、尚の事である。

確かに英雄であるスパルダにハンターの技術や知識を叩き込まれたのなら、イヤンクック戦時の“アレ”の説明がつく。

練気のセーブに、任意発動。更には音速の太刀。全てスパルダの英才教育の賜物なのだろう。

無論、熟練ハンターですら難しいそれらを短期間で会得したラスティも充分凄いが。

「———そうそう、こんなエロオヤジに気なんて遣わなくていいのよ？」

不意に、イリヤの背後から誰かが話し掛けてきた。

その人物は白を基調とした給仕服を着ており、この酒場のウェイトレスだと判断出来る。

「吹くなよ、レヴィ。」

こういうのは始めが肝心なんだ」

「いい歳した大人がなに言ってるのよ。  
はい、お待たせ」

「あ、どうもです」

スパーダと親しげに言葉を交わすウェイトレス——レヴィは、手際よくスパーダとラステイが注文していた品——ジントニックとストロベリーサンデー二つを置いていく。

彼女の名はレヴィ・アン。

ハネのあるショートの黒髪に、右目が紅、左目が翠というオッドアイが特徴的な女性である。

首都の酒場のウェイトレスだけあって、その容姿はかなりの美人と言っても過言ではないくらいだ。

大人の魅力、というものを見事に体现している。

事実、男性ハンターから絶大な人気を得ているらしい。

それに先ほどの会話から察するに、レヴィとスパーダは知らない仲ではなさそうだ。

スパーダの前にジントニックとストロベリーサンデー、ラステイの前にもう一つのストロベリーサンデーを置くと、レヴィは丁度空いているイリヤの隣に座った。

「お仕事はいいんですか？」

「私のシフトはこの注文でお願いします。

だから問題なし（ノープロBLEM）よ♪」

この行動にイリヤは訝しむが、レヴィはウィンクと共に疑問を払拭した。

その魔性のウインクを目に焼きつけた数人の野郎共が悶え死んだが、今は無視しよう。

ちなみにラスティとイリヤはクエストを受注した際の受付嬢がレヴィだった為、既に面識は済んでいる。

裏を返せば、受付嬢とウェイトレスを兼任しなければならない程、ドンドルマの酒場は忙しいのだ。

その激務をレヴィは平然と営業スマイルでこなすのだから、女とは恐ろしいものだ。

待ってましたと言わんばかりにジントニックをガブ飲みするスパーダを他所に、レヴィはラスティに話し掛けてきた。

「それにしても、最初は気づかなかったわよう。」

“隻眼の銃奏姫”が色男連れてクエスト受注してきたと思ったら、スパーダの息子だったんだから」

「“隻眼の銃奏姫”？」

「あら、知らないの？」

「イリヤちゃんの通り名よ？」

ラスティの疑問に、少々驚いた風にレヴィは返した。  
まるで知らない方がおかしいと言わんばかりに。

更に付け足すように、ジントニックを飲む手を止めて、会話に割って入る。

「“隻眼の銃奏姫” イリヤ・ブロウニング。

16歳という若さでリオレイアをソロで何頭も倒し、おまけにルックスもキュートと来たもんだ。

世間<sup>シヤバ</sup>じゃあ、今注目の若手ガンナーって言われて有名なんだぜ？」

「マジかよ！？ スゲーなイリヤ！」

「……別に、大したことじゃないわ」

口ではそういうもののイリヤの頬は若干赤く、照れているのが丸分かりだ。

そんなイリヤにレヴィは「素直じゃないわね♪」とニヤけずにはいられなかった。

通り名とは、俗に言う異名や二つ名の事である。

これを持っているハンターは、世間に名が知られている“凄腕ハンター”だという事を意味しており、ハンターにとっては勲章、誇りそのもののものだ。

ある意味、ハンターとしての一つの到達点と言えるだろう。

まあラスティの住むフェルト村は流行に疎い田舎村なのだから、知らないのは無理もない。

「通り名かア、俺も欲しいなア……。

……ん？ じゃあさ、イリヤ——」

そして世間知らずなラスティは――

「――さっきから言ってる“伝説の四英雄”ってのも、親父の通り名かなんかか？」

――爆弾を投下した。

大タル爆弾Gに匹敵した爆弾発言は、テーブルの空気を凍てつかせるには充分過ぎた。

ラスティ以外の三人は瞬きも忘れ、完璧に固まってしまう。

「あゝ、どした？」

皆揃ってフリーズして……」

流石のラスティも絶対零度な空気を感じとったのか、額から冷や汗がダラダラ流れ出している。

え？ 俺なんか変なこと言った？

っーか恐いんスけど！

皆さん瞳が濁ってんスけど！！

しかしこんな微妙な空気をいつまでも続く訳もなく、やがて均衡を破った者は――イリヤだった。

「……バカね」

「ぐっはア……ッ！」



優雅にワインを啜りながら無情にも吐き捨てられた言葉は、見事にラスティの心を玉砕してしまった。

そしてバタリとテーブルに倒れ伏してしまう。

「Oh……I'm very sad. my son……（ああ……俺は凄く悲しいよ、マイ・サン……）」

同じく息子の隣でテーブルに倒れる英雄。<sup>スパーダ</sup>

哀愁だだ漏れなその様は、惨めの一言に尽きる。

もはや英雄としての威厳など皆無に近い。

レヴィは心の中で二人に合掌した。

それからイリヤは“伝説の四英雄”についてラスティに説明を始めた。

~~~~~

今から10年前、世界に未曾有の危機が訪れた。

“覇竜アカムトルム”が現れた。

南の火山に突如出現した黒き覇竜は、その圧倒的巨大的な軀でゆっくりと歩を進めながら、近隣の村や街を塵一つ残さず潰して回ったのだ。

多くのハンターがそれに挑んだが、生きて帰って来た者はいなかった。

覇竜は世界の全てを破壊し、蹂躪し、殲滅していった。

更に追い打ちを掛けるように、悪いニュースが人々を震撼させた。覇竜の進行ルートを分析した結果、そのルート上に“大陸首都ンドルマ”が含まれていたのだ。

世界の終焉。

最期の審判。

人々は絶望し、悲運を嘆き、運命を呪った。

——だがその時、4人のハンターが覇竜討伐に声を挙げたのだ。

《叛逆の牙》  
リベリオン

団長【スパード・D・レッドグレイヴ】

《護り手の風》  
シルフィード

団長【レイチエル・アーカード】

《蛇翼殲滅団》  
ウロボロス

団長【シン・ハザマ】

《闇夜の悪夢》  
ナイトメア

団長【ギルバート・ドラグノフ】

ハンター達がチームを組んで発足する団体、“狩猟団”。

それも最強と謳われている4大狩猟団の団長が、名を挙げたのだ。

大長老は決断した。

各国の首脳と緊急会議を開き、全世界の軍隊とギルドナイトをアカムトルムにぶつけた。

これにはアカムトルムも次第に押され始め、人類側も甚大な被害を出しながらも、火山の奥地——後に“決戦場”と呼ばれる場所へ追い詰めた。

そして最強の4人のハンターを、決戦場に送り込んだ。

——世界の命運を託す。

彼らは、世界のたった1つの希望だった。

しかし、彼らの戦う理由は別にあった。

決戦前にスパイダ、レイチェル、ハザマ、ギルバートはこう言ったのだ。

「世界の命運？ そんなもん知らねえな」

「私達はハンター。なら、戦う理由は1つしかなくてよ？」

「ですよええ。」

そこに獲物がある、理由はそれだけで充分なんですよ♪」

「これは聖戦ジハードなどではない。

我々が愉しむ為の喧嘩に過ぎないのだ」

救世主メシアや英雄ヒーローを気取る訳でもなく、彼らはあくまで狩人ハンターだった。

そして4人は決戦へ臨んでいった。  
最後に、たった一言だけ残して。

『気に入らねえから潰す、それだけだ』

激戦の末、彼らは見事アカムトルムを倒した。  
それも、誰一人欠ける事なく。

こうして彼らは世界を救った英雄として、人々の間で“伝説の四英雄”と呼ばれるようになったのだ。

~~~~~

「ふーん。

そりゃスゲーな」

「なんか他人事ね……。

自分の親の事なのに」

けっこう長い話だったのに……。

明らかに興味無さげなラストイに、イリヤは眉間の皺を揉んだ。

スパイダに至っては、息子の薄すぎる反応に、今まで以上に落ち込んでしまった。

正直、見るに堪えない。

「そういえばラスティ君は出稼ぎなのよね？  
いつまでドンドルマに居るつもりなの？」

グロッキーなスパーダを無視し、レヴィは別の話題を振った。

「そつスねエ……。

まアそんなに長くは居ねエかな。

俺の村、けっこうモンスターの襲撃多いし」

ストロベリーサンデーをモグモグ食べながらラスティは答えた。

フェルト村と言えば、米の名産地。

他にも野菜や果物も数多く栽培している。

その理由は地形的に平野に面している為、農業をするのに適している土地なのだ。

が、それ故に良質な作物を狙って、度々モンスターが襲撃してくるのだ。

おまけにフェルト村は平野な土地の為、その頻度は高い。

いくら周辺のモンスターを一掃したからといって、ラスティの不安は拭えない。

故に、出稼ぎでも長居はしないのだ。

「あら、そうなの。

じゃあ、それまではイリヤちゃんと組むワケね」

「まあそうっスね」

「……え？」

なにやら話が勝手に進んでいるのを感じ、イリヤは待ったをかけた。

「どうか自分の名前が出ているので、それは確実だ。」

「ちょっと待ちなさいよラスティ。」

今回私が協力したのは、ナンパされた時の借りを返しただけよ。だから私がもうあなたと組む義理は――」

「アルエ？」

イヤンクックにサンドイッチされかけた時、助けてやったのは誰だっけな？」

ラスティはニヤニヤしながらイリヤの言葉を遮った。

そしてイリヤはギクリと硬直する。

確かに、あの時“も”ラスティに助けられた……。

それはつまり、借りはまだ返せてないという事……。

「短期間で稼がなきゃだから、大型モンスター狩るしかないかァ。うわ、俺一人じゃムリじゃね？ やべー、村の皆が心配だなァ。」

誰か一緒に来てくれねェかなァ。  
出来ればガンナー希望」

さらには明らさまな三文芝居をしでかす始末。  
ラストイの言いたい事など、分かっている。  
それを悟ったイリヤは、悔しそうにふるふる震えだし――

「……分かったわよッ!!  
一緒に組めばいいんでしょ、組めば!!!!」

――遂に降参してしまった。  
借りを返せてないだけで折れる辺り、彼女は真面目なのである。

「さっすがイリヤ!  
そう言ってくれると信じてたぜ!」

そう言うように仕向けたんでしようが。  
グッと親指を立てるラストイに、イリヤは大きくため息を溢した。

(……まあ、いつか。  
別に嫌ってワケじゃないし、付き合っただけであげるわよ)

どうせ少しの間だけだしね、とイリヤは心の中で割りきった。

（そう、少しの間だけ……）



**Act..11\Fourth legend【伝説の四英雄】（後書き）**

名前 スパーダ・D・レッドグレイヴ

身長 190cm

年齢 35歳

頭髪 短くストレートな銀髪

瞳 碧眼

ラストイの義父。

世界を救った“伝説の四英雄”の一人であり、現在はハンターを引退して大陸首都ドンドルマの都知事をしている。

いつも派手な深紅のラバーコートを着ている。

性格は面倒くさがり屋で女好きというダメ人間っぷりだが、市民からの信頼は厚い。

名前 レヴィ・アン

身長 170cm

年齢 23歳

頭髪 少しハネのあるショート黒髪

瞳 右目が紅、左目が翠のオッドアイ

ドンドルマの酒場のウェイトレス兼受付嬢。  
才色兼備、さらには拔群のスタイルを誇り、男性ハンターから絶  
大な人気を得ている。

スパードとは旧知の仲。

~~~~~

とまあ、プロフィールはこんな感じです。

今回はスパードの昔話として、アカムトルムの話を出しました。  
むちゃくちゃな内容ですいません……

そして受付嬢キャラとして【レヴィ・アン】が登場しました。  
勘のいい方ならもうお分かりかと思いますが、実はレヴィも某スタ  
イリツシユクレイジーアクションゲームを参考にしたキャラなん  
です。

ていうか、もうタグに書いてありますね（爆）

あと四英雄のレイチェルとハザマ。

この二人は某蒼に染まる格ゲーのキャラを参考にしました。  
パクリ多いなこの小説……（汗）

というわけで、次回は狩猟パートとなります。  
え？展開速すぎ？

すいません、物語構成するの下手で……

それでは（＾＾）ノシ

**A c t .. 1 2 \ S w a y m i n d 【揺れる心】 \ (前書き)**

テスト終わったぜインフェルノデイバイダー!! (≧≡≡)

……ゴホン。

どうも、更新の遅さに定評のあるスノーマンです。

いやホント、今月は特に忙し(r y

グダグダ言い訳もアレですし、ではどうぞ!

Act..12 Sway mind【揺れる心】

「……ねえ、ラスティ？」

「ん？」

「……どうして、こんな依頼選んだの？」

スパードと再開したあの時から数日、ラスティとイリヤはノーレ密林へ来ていた。

どうやら彼らは、今回の依頼は此処で遂行するようだ。

今は準備をするべく、ベースキャンプでアイテムの整理を行っている。

ノーレ密林は構造上、巨大な湖の中洲に位置している。

その為、湖を渡る船を使ってベースキャンプの代用とするのだ。

砂浜に船を固定するだけなので、いちいちテントを張る必要はない。

どうやら今回の依頼、イリヤが呆れたように眉間の皺を揉んでいる辺り、彼女にとってはあまり歓迎されたものではないようだ。

「どうしてよりもよって、“ババコンガ”が相手なのよ……」

どんよりとした空気を纏い、愚痴を溢すイリヤ。

何故ババコンガ討伐の依頼なのか、それは酒場からの出発前までさかのぼる。

~~~~~

ラスティ達はその後、酒場の上層階にあるホテルに泊まり——無論、部屋は別々で——翌朝、二人は酒場にて朝食を摂っていた。ラスティは白いシャツに黒いジーンズ、首に赤のアミュレットネックレスという、いつもの私服姿。

対してイリヤは、既にレイアシリーズの防具に着替えていた。

二人はテーブルを挟み、食事をしながらこれからの事を相談している。

ラスティは朝のトーストセットにスープを、イリヤはサンドイッチセットといった具合だ。

「じゃあ、軽くリオレウス行っとくか？」

「なら、これが最後の晚餐となるわね」

「ぎゃー、奴のブレスでこんがりローストにされる」

「バカ言っでないで、真面目に考えなさい」

ノリ悪イなり、とラスティは愚痴ってチラリと横を見る。

依頼を貼る掲示板を見ているのだ。

ちなみに、彼らは依頼掲示板から比較的近いテーブルに居るため、座ったまま見る事ができた。

トースト片手に食べながら、ラスティは掲示板に貼られた依頼書を吟味していく。

「最近、新種のモンスターがバンバン出てきてるからなア。ジンオウガとか、ボルボロスとか。

なんかティガの亜種まで出てきたらしいじゃん？」

「ちゃんと自分の実力に合ったものを選びなさいよ」

「分かってるって」

イリヤの忠告を聞き流し、依頼を選んでいく。

間もない内に、ラスティは即決で一枚の依頼書を取ると、それをイリヤに見せた。

ちょうど、イリヤがサンドイッチの最後の一口を食べようとしていた時だ。

もう決めたの、と言いながらイリヤはまず討伐対象に目を配る。

——瞬間、イリヤの顔がサアーツと真っ青に染まった。

「“ババコンガ”狩ろうぜ！」

イリヤの手から、ポロリとサンドイッチが零れ落ちた……。

~~~~~

「憂鬱だわ……」

ベースキャンプ備え付けのベッドに座り、ため息を吐くイリヤ。それだけで、どれだけ今回の依頼に乗り気じゃないか理解ができる。

すぐに道具の整理を終え、ラスティ達は作戦会議を始めた。

「はっきり言って、ババコンガはイャンクック程強くないわ。動きは緩慢で見切りやすい上に、鱗や甲殻はないから、ラスティの気刃斬りならより効果的にダメージを与えられる筈よ」

「ハッ、いいね！

今回は楽勝だな！」

「でも、一撃の重さはイャンクックより強いわ。それに筋肉も強いから、刃が通りにくい。いかに冷静に動きを読んで戦うかが焦点となるわ」

イリヤは的確にババコンガの要点を説明していく。しかし説明していくにつれ、見るからに嫌そうな顔に変わっていった。

何故なら――――

「……これが一番重要よ。」

ババコンガの本当の脅威は、“放屁”と“糞”よ」

「……What, s？」

——これこそが、イリヤがババコンガを毛嫌いする理由だからだ。

何も知らないラスティは、意外な発言に哑然とする。

「奴の放屁をまともに食らえば、殆んどのアイテムが使えなくなるのは勿論、酷い吐き気に襲われて呼吸が困難になる。

激臭で目に滲みるし、意識は朦朧とするし、戦意はガタ落ち必至。放屁でこれなんだから、糞なんて直撃を受けたら……もう分かるわね？」

「……マジですか」

「……残念ながら、マジよ」

互いに顔を見合せると、みるみる内に二人の顔色が青ざめ、冷や汗が頬を伝う。

ラスティは漸く、イリヤがババコンガを拒絶する理由が分かった。モンスターの放屁を食らうなど、人間なら誰でも嫌になるだろう。ましてや糞を投げつけられるなど、一生トラウマになりかねない。否、確実になる。



「まア、アレだ！」

要はその攻撃さえ氣イ付けりゃいいんだろ？  
当たりさえしなきゃ、どうってことはねェさ！」

「……そうね、もしその攻撃を受けた時の為に“消臭玉”が支給されているのだから。

いつまでもウジウジしてられないわ」

苦し紛れにラスティは樂觀的な意見を出す、結局の所それが正論なのだ。

イリヤもラスティの言葉を聞いて、金色の瞳に戦意を宿した。  
“隻眼の銃奏姫”の二つ名に懸けて、下位のババコンガに臆してないといられない。

「それに、“こいつ”の慣らしには丁度いいさ」

そう言って、ラスティは自身の防具をコンコンと叩く。

今、彼が着ている防具はランポスシリーズではない。

桃色の防具“クックシリーズ”だ。

前にイャンクックとの戦闘にて、著しく損傷した箇所が殆んど無く、通常より多めに剥ぎ取れた為、ドンドルマの工房にてクックシリーズ一式を揃えることが出来たのである。

イリヤのボウガンの高い制動力と、ラスティの音速の太刀だからこそできた芸当だ。

クックシリーズは主に甲殻で構成されているから、鱗を何重も重

ねたランポスシリーズより軽量に造られている。  
それでいて、ランポスシリーズより防御力は高い。  
報酬で財布が豊かになったラスティに、造らない理由は無かったのだ。

ちなみにちゃんと一式揃えた為、頭部<sup>ヘルム</sup>防具もキチンと被っている。  
最初こそ嫌がっていたが、「また頭から血のシャワーを出したいの？」とイリヤに言われ渋々と、といった次第だ。

イリヤは通常弾 L.V. 1 をヴァルキリーファイアに装填して、肩に通した。

「じゃあ、準備が出来たなら行くわよ」

「オーケー。」

ま、気楽に行こうぜ」

ラスティも骨刀【狼牙】を鞘にしまい、二人はベースキャンプから出発した。

ババコンガは基本的に林のエリアに現れる。

というイリヤの言葉に従い、砂浜が広がる西側ではなく、原生林のある東側を進んでいた。

ベースキャンプから東へ進んだエリア1、更に北のエリア2の中央辺りまで歩いた所で――二人は足を止めた。

「……妙だな」

「……ええ、そうね」

二人は訝しげに眩き、周囲を警戒する。  
だがいくら見回したところで、動くものは二人以外何一つ存在しない。

「まだ私達はランポスどころか、アプトノスの一頭も遭遇していない。」

……不気味、ね」

「ああ……。」

この静かさ……気に入らねェな」

“敵に遭遇していない”事が、逆に不審で仕方がない。

虫の羽音も、小鳥の囀りも、全く聞こえない。

湖の波打つかすかな音が、やけに良く響く。

それがかえって不気味なのだ。

だが、いくら警戒した所で事態が好転する訳もない。  
痺れを切らしたラストィは、大胆な行動に出た。

「ちわーっす!!」

ピザの配達に来ましたー!!

誰かいーまーせーんーかー!!?」

「ちょっと、ラスティ!？」

大声を上げながら、パンパンと大げさに手を叩き、ぶらりぶらり歩き回り始めた。

突然のラスティの愚行に驚くイリヤだが、すぐに「もう、油断するとこれなんだから……」と、ため息混じりに呟く。ラスティの大胆さに、いい加減慣れてきたのだろう。まあ、こんな事でいちいち眉間に皺を作っているのは、精神的に参ってしまう。

思えばラスティに出会った時から、自分の調子が狂いっぱなしだ。能天気で、マイペースで、雲のように気まぐれな男。加えて、好戦的。

普段から人とあまり関わりを持たないイリヤにとって、ラスティという人間は異例イレギュラーだった。

馴れ馴れしい、と最初は疎ましく思っていた。

“隻眼の銃奏姫”と持て囃され、それを名目に言い寄ってくる男共と同じ類いだ、と思っていた。

だが、彼は違った。

彼は、自分の命の危機から救ってくれた。

今だから言える事だが、ラスティがあの時イャンクックからイリヤを助ける事は――常人ではまず不可能だった。

尻尾の一撃を頭にモロに食らい、更に吹っ飛ばされた際に大岩に背中、頭を再び強打していた。

当時、ヘルムを被っていない頭を、だ。

それなのに、ハンターとして鍛えてあるとしても、平然と立ってい

られる人間がいるだろうか？

答えはノーだ。

表面上は余裕ぶってはいたが、恐らく動かない身体に鞭打って、死ぬ気の行動だったに違いない。

何故なら、吹っ飛ばされた大岩に、大量の血がぶちまけられていたのだから。

「本当に、変な奴よね……」

勝手に歩き回って、「お、特産キノコだ。 儲け儲け♪」なんて言っているラスティの背中を見ながら、フツとイリヤは微笑んだ。

イリヤは薄々と、ラスティと行動を共にする事も——成り行きではあるが——まんざらではないと感じ始めていた。

戦術も心構えも未熟だが、そんじょそこのハンターよりは、よっぽどタフな男だ。

何より、彼は信頼出来るから。

しかし——

「……でも、いつまでも彼と組む、という訳にはいかない。

私は、“悲願”を果たさなければならぬから……」

さつきと変わって、暗い表情になるイリヤ。

ギリ……と歯軋りし、隻眼を鋭く歪ませる。

激しい怒りと、深い悲しみ。

二つの感情が、彼女の中で渦巻いていた。

「おい、イリヤー！  
マジでいねエみてーだし、もっと奥に行ってみよーぜー！」

そんな彼女の心中など、ラスティは知る由もない。

粗方歩き回ったラスティは、イリヤーの元に戻ろうと歩を進めた。

その時だった。

突然、空から何か飛来して来たのは――

――ズウウン！！

「あ？」

「ッ！？」

それは、丁度ラスティとイリヤーの間に落ちてきた。

すっとんきょうな声を出したラスティとは対照的に、イリヤーは即時戦闘態勢に移行する。

二人が挟んで見据える先――その巨大な体躯は、モンスターというより人間のそれに近い。

何より、全身に纏った桃色の毛が、全てを物語っていた。

あれが——桃毛獣、ババコンガだ。

「ボアアアアア——！」

ババコンガは二人を確認すると、奇妙に腰を振るわせて吠えた。  
これは威嚇——ババコンガは、二人を敵と認識した。

「こいつがババコンガか。ふざけた挨拶しやがる」

対してラスティは驚きもせず、逆に不敵に笑いながら骨刀に手を  
掛ける。

反対側のイリヤも、ヴァルキリーファイアを構え、トリガーに指を  
掛けた。

「「Engage!!（交戦開始!!）」」

——シャキンッ

骨刀を引き抜く乾いた音。  
それが、開戦の合図ゴングだった。

**Act..12 Sway mind【揺れる心】（後書き）**

如何でしたか？

今回の相手はピンクコングです。

ゲームではともかく、実際に糞なんて投げられたらどんな感じなんでしょう。

想像して下さい。

“直撃すると痛いぐらい固い糞”が、顔面にメキヨツ♪です。

……はい、トラウマ決定です。

付け加え、イリヤの心情も少し書いてみました。

なんか、ずいぶん丸くなった感じがしちゃいますね。

あの時、颯爽とイリヤを助けたラストイは実はあんな感じだったんです。

想像して下さい。

ボブ・サップのガチ拳骨を食らって、コンクリートに頭叩きつけられる感じです。

……はい、死にますね♪

ずいぶん長くなってしまいました。

次回、本格的にゴリラ狩りへと参ります。

イリヤの悲願については、また後程。

では（^▽^）ノ



**Act.: 13 (Double booking【ダブル・ブッキング】) (前)**

俺の時代(季節)がキタアアアアア!! (≡ω≡)

ども、スノーマンです。

やはり戦闘シーンとなるとスラスラ書けますね。

え? それでも2週間は遅いって?

はい、そうですね: orz

## Act.13 Double booking【ダブル・ブッキング】

「ボアアアア!!!」

「Engage!!（交戦開始!!!）」

ババコンガの正面、ラスティは骨刀を抜刀し、真っ向から走り出す。

自慢の俊足で、ババコンガが威嚇の態勢を解くより早く目の前に迫り、袈裟懸けに刃を振り下ろす。

「浅エ…ッ!」

しかしババコンガの左肩をバツサリ斬り裂くには至らず、筋肉に阻まれて刃が通り切らない。

弾かれはしなかったが、斬れたのは薄皮一枚、といった所だろうか。

ババコンガのような牙獣種の最大の特徴は、“強靱な筋肉”にある。

飛竜種のような鱗も無ければ、甲殻種のような甲殻も無い。

しかし、それを補って余りある筋肉が、己の武器となり、防壁となる。

零距离での格闘戦に特化したモンスター、それが牙獣種なのだ。

まずは眼前の敵を潰す。

そう判断したババコンガは、ラスティの斬撃など意に介さず、右腕

を大振りに振り下ろした。

が、すかさずラストイは真横にローリングで回避。  
ババコンガの殴打は虚しく空を切る。

——ダン！

ババコンガは、今度は背後からの衝撃を感じた。

途端にベチャリ、とピンク色の塗料が付着し、奇妙な匂いが漂う。  
イリヤのペイント弾である。

ババコンガは背後のイリヤに振り返ると、獣らしく四つん這いの  
態勢になり、突進した。

しかし距離が開いている為、イリヤは楽々と横にローリングして回  
避。

その後すぐに膝立ちの体勢になると、イリヤは素早く通常弾Lv.  
2を装填。

突進にブレーキを掛けたババコンガに、引き金を弾き始める。

再び背中に弾丸を食らうババコンガ。

取り逃がした獲物、イリヤへと再び振り返るババコンガだが——  
目の前で、赤い髪が揺らめいた。

「いイヤア！！」

——ザシュッ！！

「ボア！？」

いつの間に追いついていたのか、ラスティは振り返ったババコンガの顔面を力任せに薙ぎ払った。  
いきなり顔面に一文字に斬られたババコンガは、堪らず怯んでしまう。

「もう一丁ッ！」

怯んだ隙に、更に骨刀を振り上げ、斬り下ろす。

しかしどれだけ力任せな大振りをしようとも——まあ、ラスティが力任せで大振りな太刀筋なのはいつもの事だが——血の噴水を作り出す程のダメージには至らない。

すぐにババコンガは態勢を持ち直し、これまたラスティに大振りに右拳を振るう。

「Too late. (遅エよ)」

しかしその攻撃を、ラスティは“その場”で屈んただけで回避した。

チッ、と右拳が髪の毛に掠る。

大振りな攻撃を避けられ、ババコンガ一瞬の隙が生まれる。

その僅か隙にラスティは骨刀を逆手に持ち換え、勢いよく立ち上がると同時に、アップパーの如く斬り上げた！

「おらアッ!」

——ズバアッ!!

「ボアアア!」

下腹部から顔面まで一気に斬り裂かれ、あまりの痛みにたたたらを踏むババコンガ。

致命傷ではないが、確実に今の一撃は効いた筈だ。

ラスティは基本的に、力任せの正面突破を好む。

その強引なバトルスタイルは——太刀使いとしては二流だが——  
——どうやらババコンガ相手には有利に働いているらしい。

「真っ正面の殴り合いが得意なのは、テメエだけじゃねーんだぜ？」

追い打ちを掛けることなく、クイクイと挑発するように人差し指を動かし、「してやったり」と不敵に笑うラスティ。

この音速野郎、完全に舐めてやがる。

ババコンガは体勢を立て直すと、より殺気の込もった目でギロリとラスティを睨む。

常人なら腰を抜かす眼孔だが、ラスティは「それでメンチ切ってるつもりかよ?」という感じの余裕の表情を崩さない。

「つか——俺ばっか構っていいのかい？」

ラスティが親切に注意したその時——トン、とババコンガの背中  
中に何かが接触した。

「——少しは真面目にやりなさいよ、ラスティ」

続いてババコンガの背後から、ため息混じりのイリヤの声が聞こ  
えた。

なんとイリヤは、ラスティとババコンガが格闘している隙に、背後  
に回り込んでいたのだ。

つまりババコンガの背に接触したのは——ヴァルキリーファイ  
アのロングバレル。

イリヤは躊躇いなく、そのまま零距离で引き金を弾いた。

——ダァン！

「ボア!？」

すつとんきょうな声を出すババコンガ。

驚くのも無理はない。

イリヤが撃った弾丸は、散弾L.V. 1なのだ。

散弾とは、その名の通り弾頭が前方に散らばる弾丸の事。  
その為、近距離での破壊力に優れている。

しかし、イリヤは近距離ではなく“零距离”でそれを撃った。  
バラバラに散らばる筈の弾丸が、L.V. 1と言えど一点に集中すれば——威力は言うまでもない。

——ダァン！　ダァン！　ダァン！

だがこれだけで終わらず、イリヤは装填した散弾4発——即ち残り3発を、全て零距离でババコンガにブチ込んでいく。

「ハハッ！　クールだぜ、イリヤ！」

——ズバツズバツ——！！

前方のラスティも——散弾は全てババコンガに命中してる為、誤射の心配は無い——骨刀に練気を纏わせ、音速の気刃斬りを繰り出す。

その不可視の刃は、まるでバターを斬るようにババコンガを刻んでゆく。

余程ババコンガの放屁と糞を貰いたくないのだろう、二人は自然と短期決戦に持ち込もうとしていた。

だが——

「ラスティ！　離れて！」

猛攻を受けながらも、ババコンガは二足で立ち上がった。  
その行動に即座に反応したイリヤは後退を指示すると、二人共バツクステップして一旦離れる。

「ボアアアアア！！！」

イリヤの後退指示は正解だった。  
ババコンガは激しく腰を左右に振り、放屁を撒き散らしながら、怒号を上げたのだ。

「ハッ、早速キレたか」

ニヤリと口を歪め、吐き捨てるラスティ。  
見れば、ババコンガの顔は怒り心頭真っ赤っ赤。  
鼻息もフーフーとかなり荒い。  
間違いなく“怒り状態”だ。

ラスティは不敵な笑みを浮かべたまま、何かしら来るであろう攻撃に身構える。  
対しババコンガは、そんなことお構い無しにラスティに突進した。

「おっと」



怒り状態である為、その突進は通常時の倍近く速い。

しかし、予め予想していたラスティはそれをステップで軽く避けた。

ババコンガは「目標を外した」と瞬時に理解し、ラスティからは僅か2メートル程離れた所で急停止し、ラスティに向き直る。

どうやら怒り状態では、反応速度も強化されるようだ。

ラスティも攻勢を緩めず、太刀を逆手に持ったまま再び正面から攻め込む。

その時、異変は起きた――

「ギャオワツ！ ギャオワツ！」

突如、ランポスの群れが乱入してきたのだ。

位置的にはイリヤのやや後方――つまり、先程通ったエリア1から北上してきたようだ。

更に数はみるみるうちに増えていき、群れは瞬く間に20体近い規模に膨れ上がる。

「ランポス！？」

……私が迎撃するわ、ラスティはババコンガに専念して！」

突然の奇襲に驚くイリヤだが、すぐに冷静に指示を飛ばす。

それにラスティは文句を言おうとするものの、ババコンガとの攻

防で阻まれる。

だが何とか距離を取り、ババコンガから目を逸らさず言葉を発した。

「バカ野郎！！　ボウガンであの数は無茶だ！！」

「無茶ではないわ」

イリヤは通常弾Lv1を装填すると、アイテムポーチから握り拳一つ分の大きさの玉を取り出した。

その間にも、ランポスの津波はイリヤに押し寄せてくる。

「――使える物は何でも使う、それがハンターよ」

そしてイリヤは手に持った玉の安全ピンを口に挟んで抜き取ると、玉を地面に叩きつけた。

刹那、叩きつけられた玉は破裂し、爆発的な閃光が煌めいた。

一瞬で視界が真っ白になる程の、目映い光。

ラストィはその閃光の正体に気付くと、反射的に片腕で両目を覆った。

「成る程、“閃光玉”か。

こりゃ一本取られたぜ」

眩き、目を開けると、ランポスの群れは一匹残らず視界を焼かれ、  
たたらを踏んでいた。

イリヤが投げた“閃光玉”は、文字通り破裂すると光が炸裂する  
玉である。フラッシュ

素材玉と光蟲を組み合わせた物で、強烈な閃光は人間は勿論、モン  
スターの視界を一時的に潰す事が出来るのだ。

視界を奪われ混乱するランポス達に、イリヤは容赦無く引き金を  
弾き始める。

一匹ずつ確実に、ランポスをヘッドショットにて一撃で沈めていく。

ラストイはババコンガに向き直と、幸運な事にババコンガも閃光  
玉を食らっていた。

目を開けられず、がむしゃらに腕を振り回している。

「嬉しい誤算ってヤツか？ おらァー!!」

すかさずババコンガの側面に回り込み、斬りつける。

このチャンス、逃す手はない。

ババコンガも斬られた痛覚を頼りに、見えないラストイに腕を振  
り回す。

しかしラストイはただ斬っているのではなく、横にステップして避  
けながら斬っていく。

「ハハッ！ 鬼さんこちら♪」

斬っては避け、斬っては避け。  
完全にラスティのお手玉である。

しかし、直に閃光玉の効果は無くなってしまう。  
ババコンガはやっと視界を回復し、ランポス達も同じく視力が戻ってしまった。

「残ったのは4体、か……」

何の気なしに呟くイリヤ。  
イリヤは確実にヘッドショットを決める為に、接近してランポスを撃っていたのだ。  
その為、イリヤの“目の前”には4体のランポスが――

「ギャア！ ギャア！」

ランポス達の行動は速かった。  
残った4体は、瞬く間にイリヤの四方を包囲したのだ。

対し、イリヤはニヤリと唇を吊り上げる。  
まるで「この状況を待っていた」と言わんばかりに……

無言のまま、イリヤは静かに散弾L.V. 1を装填する。  
瞬間――四方を囲んだランポスは一斉に飛び掛かった。

4つの牙が、イリヤに襲い掛かる。

ガンナーにとって絶体絶命——にも拘わらず、フツとイリヤは鼻で笑った。

「It's like hunting duck (鴨撃ちね)」

そしてヴァルキリーファイアの引き金に指を添え——薙いだ。

——ダダダダンッ!!

「ギャアッ!？」

まさに一瞬の出来事。

イリヤはヴァルキリーファイアを、まるでヌンチャクを振り回すように発砲したのだ。

結果、4発の散弾は“ほぼ同時”に四方のランポスに降り注いだ。至近距離での散弾を受けた4体は大きく吹っ飛び、そのまま息絶える。

「ガンナーは接近戦に不利……なんて、思わないことね」

吐き捨てるように、空葉莢を廃莢する。

イリヤの強みは、ソロハントを繰り返して獲得した銃捌き（ファアワークス）にある。

散弾を4発撃てるヴァルキリーファイア、そしてイリヤの制動力が合わさって、初めて出来る芸当なのだ。  
ガンズリンガー  
銃奏姫の名は伊達ではない。

全てのランポスを片付けた事を確認すると、イリヤはババコンガと攻防を繰り返るラストイを見やる。

「……ホント、狩りを心の底から楽しんでいるわね」

やれやれとぼやくも、援護に復帰するべく走り出すイリヤ。

狩りはまだ、始まったばかりだ……

すいません、やりすぎましたm（　　）m  
完全に原作を無視ってます。

太刀を逆手で使うとか、ボウガンをヌンチャク染みた使い方と  
かw

自分はゲームの動きに拘らないよう書いているんですが、改めてこ  
れはヒドイww

まあ既にランポスの首をへし折ったりしてますし、今さらですかね  
（爆）

というわけで、次回の更新もいつになるか分かりません（汗）  
でも暫くは特に大会等の予定は無いので、2週間以内は目指したい  
です。

それでは（^▽^）ノ

**A c t . 1 4 \ S h a d o w o f t h e u n k n o w n** 【アンノウンの影

え〜……とりあえず遅くなってしまい、すいませんでした m (

し m

理由は後書きにでも……



**Act..14 Shadow of the unknown**【アンノウンの影

「ボアアアアア！」

イリヤがランポスの群れに当たっている頃、ラスティもババコンガと真っ向から対峙していた。

「Hay! come on!

おらどうした、掠りもしねエぜ?」

否、ラスティの闘牛ショーと化していた。

怒り狂うババコンガの猛撃を、ラスティは嘲笑うかのようにヒラリヒラリと避けていく。

スウェー、ステップ、果てにはバック転をして完璧に遊んでいる始末だ。

しかし、彼もただ遊んでいる訳ではない。

（イリヤがランポスを片付けてる間は、俺がコイツを引き付けておかねエとな。

今は逃げ逃げっと♪）

イリヤは背を向けてランポスの掃討に専念している。

それなりに距離はあるし、イリヤなら気配で背後からの攻撃を察す

るだろうが、念には念を、とラスティは考えていた。  
事実、イリヤとババコンガの距離は徐々に開いていく。

どうやらブチギレたババコンガには、この憎たらしい音速野郎にしか眼中にないらしい。

「ラスティ！」

と、そうこうしている内にランポス20頭を始末したイリヤがラスティの傍に戻ってくる。

まだ時間が掛かると思っていたのか、ラスティは「流石、早いな」と口笛を吹いた。

「撤甲榴弾を使うわ！」

スタンさせて一気に勝負を決めるわよ！」

「ハハッ！ いいね！！！」

互いに声を掛け合い、直ぐに作戦が決まる。

この二人、マジで短期決戦を決め込む算段だ。

ババコンガは二人ごと沈めようと迷わず突進。

しかし、二人は左右に分かれて回避する。

ババコンガは直ぐに急停止、そしてイリヤを狙い身体を向ける。

———ダァンッ———！！

その顔を此方に向ける一瞬を狙い、イリヤは引き金を弾いた。  
弾種は勿論、撤甲榴弾Lv. 1。

その弾丸は寸分狂わず、ババコンガの眉間に命中する。  
しかしそんな事意に介さずに、構わずイリヤに突撃する。

——ドオンッ！！

その突撃の最中に、時間差で撤甲榴弾の炸薬が爆ぜた。  
それでも呻き声一つ上げず、ババコンガは止まらない。  
肉体がタフなだけあって、やはり簡単に怯みやしない。

「チッ……！！」

イリヤは面倒くさ気に舌打ちし、素早くローリングで回避。  
そして慣れた手付きで、再び撤甲榴弾Lv. 1をクイックリロード  
する。

「汚ねエケツがガラ空きだぜッ！」

ここで突進後の一瞬の硬直を狙い、ラスティが背中を斬りつける。  
その攻撃をもとめせず、ババコンガは振り向き様に腕を薙ぐ。  
しかしそんな鈍重な反撃、ラスティはあたかもリンボーダンスのよ

うに、上半身を後ろに反らすだけで避けてみせた。

「――任せたぜ」

そして避けた体勢のまま、“既に自分の背後でボウガンを構えているイリヤ”にポツリと呟いた。

ラストィが身体を反らしている為、射線は開いている。

イリヤの隻眼に移るのは、腕を振り抜いて無防備なババコンガだけ。迷わず、ボウガンの銃爪を引き絞る――！

――ダアンツ！

「ボアアッ！？」

ラストィを挟んで零距离で放たれた撤甲榴弾は、またもや眉間に刺さる。

二度も1ミリの誤差なく同じ箇所を撃たれ、流石のババコンガも二、三步後退したたらを踏んだ。

更に――

「ついでだッ！」

ラスティは身体を戻すと、ババコンガの眉間——刺さっている  
撤甲榴弾に、骨刀の柄尻で殴りつけた。

——グシャッ！

不快な音を立て、撤甲榴弾は更に眉間の奥深くへ振じ込められる。  
が、ラスティの攻撃は終わらない。

「Take this!!（こいつも食らっとけ!!）」

骨刀を上空に放り投げ、大きく跳躍。  
ババコンガの顔面目掛け、ドロップキックを繰り出す！

——ゴッ!!

「ボアアアッ!？」

鈍い音を立て、更に後ずさるババコンガ。  
恐らくこの一撃で、撤甲榴弾は頭蓋骨に触れるほど深く刺さったの  
だろう。

ババコンガはそのまま頭を抑えて悶絶してしまう。

———というか、ババコンガを怯ませる程の蹴りを放つラスティ  
もラスティである。

もうどっちが怪物なのか分かったもんじゃねえ。  
モンスター

ラスティはドロップキックから器用に着地すると、右手の指で拳銃を形作り、それをババコンガに向けた。

「Bang! (爆ぜろ!)」

——ドオンッ!

あたかも拳銃を撃ったようなアクションと同時に、撤甲榴弾が炸裂。

それも、ただ炸裂しただけではない。

ラスティによって、ババコンガの頑丈な外皮を突き破る程ねじ込められた撤甲榴弾は、より頭蓋を揺さぶり、より脳髓にホットな刺激を提供する。

結果——

「ボアアアアア!?!」

——たったの二発で、スタン状態に陥ってしまうのだ。

ババコンガは脳震盪を起こし、無様に地に倒れ伏す。

ラスティは指の拳銃を口元に寄せ、硝煙を吹き消すように息を吐いた。

「……決まったッ」

「まだ生きてるわよ、バカ」

キザに決めたラスティを、背後で容赦なくイリヤはツツコミを入れる。

見れば、ババコンガは混乱して立ち上がれず足掻いていた。

「いいじゃねエか、カッコつけるぐらい」とラスティは愚痴り、先ほど投げて漸く落下してきた骨刀を掴み、もがくババコンガに攻撃を再開した。

「おらおらおらア!!」

相手は反撃も出来ない格好の獲物。

それを良いことに、ラスティはババコンガの顔面を、骨刀で何度も何度も打ち付ける。

——ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

斬撃、と言うより打撃に近い。

乱暴に、ただ力任せに、ラスティはサデイスティックな笑みを浮かべながら骨刀を叩きつけてゆく。

多少切れ味が落ちようが、今は知ったことか。

一方、イリヤは横から回り込み、ババコンガの背中側に移動。

ほぼ零距离まで近づくと、ここで“散弾L.V. 2”を初めて装填す

る。

そして手早く装填を終え、零距离のままババコンガの背中に銃口を向ける。

——この時、イリヤはグリップを握っている右手の親指で、トリガー近くの小さなセーフティレバーを弾いた。

瞬間、キュイイン……と何かの駆動音が静かに鳴動した。

「Rapid fire」

咄くと同時に、イリヤは引き金を“一回”弾いた。

瞬間——！

——ダダダアンツ——！

“三発”の散弾がババコンガに殺到した。

これがヴァルキリーファイアの真骨頂、散弾の速射機能である。

セーフティを解く事で内蔵されたモーターが起動、散弾Lv. 1、2の三点バーストを可能とするのだ。

ソロハントを主とするイリヤにとって、これ以上相応しい猟銃はないだろう。

ラストイとは対照的に、イリヤは静かに、無慈悲にトリガーを弾き続け、バラバラの弾丸がババコンガを穿つ。

前方は斬撃の暴風、後方は散弾の嵐。

ラストイが骨刀を振り降ろす度に、イリヤがトリガーを弾く度に、ババコンガの周りに血溜まりが出来上がってゆく。



「ボアア……！」

しかし、R指定を付けたくなる攻撃も長くは続かない。  
混乱が解け、ババコンガはゆっくりと力無く立ち上がる。  
既にかなりのダメージを与えたようで、もう全身の桃色の毛は赤く染まりきっている。  
息は絶え絶えで、涎もだらしなく垂れ流しており、もはやスタミナも限界に近かった。

「ボア……」

くるり、とババコンガは何の前触れもなく踵を返した。  
するとどうしたとか、ババコンガはラスティ達に背を向ける形で、片足を引きずりながら逃げ始めた。  
ラスティはこれを好機とし、一気にトドメを刺そうと骨刀を構え直す。

「よっしゃ！ こいつで——」

「待って！！」

しかし突然、それはイリヤの手に遮られた。  
出鼻を挫かれたラスティは当然、抗議の声を上げる。

「なんだよ、あとちょいで倒センだろーよ」

「ええ、けど少し気になる事があるの」

やけに陰しい顔で返事をするイリヤ。

妙に真剣な雰囲気だった為か、ラスティは「チッ、分かったよ」と舌打ちして素直に骨刀を鞘に納めた。

その間にババコンガは更に二人から離れていき、最後には空高く跳躍して別のエリアへと逃げて行った。

一旦戦闘が終わり、再び場は静寂に戻される。

「ラスティ、依頼書はあんたが持ってるわよね？  
ちよつと見せて」

「ああ？ ……ほらよ」

いきなり依頼書を見せろと言われ、ラスティはよく分からないまま言われるままに依頼書を渡す。

イリヤが依頼書を見ている間、ラスティは武器の切れ味を戻そうとポーチから砥石を取り出し、骨刀を研ぎ始める。

（……何度確認しても「狩猟環境不安定」の印は無い。  
下位の依頼だから当然だけど……）

〔狩猟環境不安定〕

狩猟目標以外の大型モンスターが潜伏している可能性がある依頼に指定されるサインである。

潜伏しているモンスターが乱入してくる危険がある為、上位〈G級依頼にのみ指定される。

その為、下位の依頼には無い筈なのだが……

（でも、ギルドナイトが見落としていたのだとしたら……？）

ここまで考えて、イリヤは辺りを見回す。

広がるのは緑豊かな原生林。

しかし、やはり不気味な程静まり返っている。

（あれは……？）

ふとイリヤは何かに気付き、そこに向かって歩き始めた。

「おい、いきなりどこ行くんだよ」

骨刀を研ぎ終えたラストイもイリヤに気付き、それに付いていく。程なくして、二人はそこにたどり着いた。

そこにあったのは――

「なんだ……こいつは？」

——巨大な足跡だった。

その大きさは二メートル近くあり、三つの鋭利な爪らしきものが扇状に並んでいる形をしている。

イリヤは屈んで、その足跡に触れてみた。

「……まだ新しい」

なぞるように触って土質を確認し、呟く。

どうやら、この足跡が出来上がってからそんなに時間は経ってないようだ。

「……これで繋がったわね」

何処か納得のいった表情でイリヤは立ち上がる。

無論ラスティは何が何だがさっぱり、と言った感じだ。

「は？ 繋がった？」

「ええ。早くこの依頼を片付けた方がいいわね。」

……ババコンガ以外にも大型モンスターが棲んでいるわ」

「げ、マジかよ……」

イリヤから告げられた途端、げんなりと項垂れるラスティ。

彼は戦いは好きだが、報酬に入っていないモンスターの相手などはつきり言って面倒くさいだけなのだ。

戦った所で一文の得にもなりやしない。

「その大型モンスターはババコンガと縄張り争いをしているのだと思う。」

そのせいで密林の鳥達は逃げた。だから森が不気味に静まり返っているのね。

そしてその縄張り争いは、ババコンガが劣勢。だから私達の初撃で瀕死になる程弱っていた。

それに……」

「まだ何かあんのかよ？」

「ええ、これが一番重要。」

縄張り争いを仕掛ける程のモンスター……恐らく上位、もしくはG級相当の大物よ。

それもこの足跡……飛竜種か獣竜種のもので間違いないわ

——私達が来たのは狩場じゃなく、モンスター達の戦場だったようね」  
キリングフィールド

ラスティは絶句した。

自分達は既に、モンスターの抗争の真っ只中にみすみす飛び込んでいたのだ。

しかも、片方は最低でも上位クラスの竜。

いや、もしかしたらG級のバケモンかも知れない。

ラストィは、背中に冷たい汗が走ったように感じた。

「……めんどくせエ事になりやがった」

乱暴に頭を搔いて、吐き捨てるラストィ。

楽勝な筈の依頼が、一瞬で危険度のオッズがはね上がったのだ。

「とにかく、ババコンガを狩りましょう。

幸い、もう瀕死状態だから直ぐに勝負はつく。

もし途中で“アンノウン”に出会ったら、即退却。」

「そうするしかねエか、クソ……ッ！」

苦虫を噛み潰したような表情で、イリヤの作戦を肯定する。

そして二人はペイントの匂いを頼りに、密林を進んでいく。

その足取りは、どこか重く……

(どうも嫌な予感がするぜ……)

ラストィは、心の中で舌打ちした。



**Act. 14 Shadow of the unknown**【アンノウンの影

え〜……この度は一ヶ月も更新ストップしてしまいすみませんでした。

言い訳しますと、実は暫く風邪で寝込んでたんです。

オマケにこのシーズン、雪国の旅館はマジで忙しくて……(汗)

ラストイ

「――それだけじゃねエよな？」

ギクツ(一・一；)

イリヤ

「あんた、一時期“モンハン3rd”や“ザ・3rd・バースデイ”ばかりやっていたでしょう」

ギクギクツ！(へ。へ；)

ラストイ

「ほう、スノーマンよ……」

小便は済ませたか？

神サマにお願いは？

部屋の片隅でガタガタ震えてフルボッコされる心の準備はオーケー？」(バキボキ……)

え？ちょ、おま、ギャアアアアア！！？



イリヤ  
「F o l i s h  
b o y … (バカな男 …) 」

**Act.: 15) Demons guest** 【悪魔の来訪】 (前書き)

どうも、スノーマンです。

今回は忙しい中での急ごしらえなので、少し短いです。

まあ字数的な理由もありまして…… (汗)  
とにかく、どうぞッ！

あ、俺明日テストじゃんWWW

## Act..15\ Demons guest【悪魔の来訪】

その後二人は軽い話し合いの結果、ババコンガは“捕獲”する事に決めた。

下位のクエストという事もあり、幸い捕獲用の道具は一式支給されている。

「瀕死までダメージを負わせたから、今はエリア6で眠っている筈」とイリヤの意見。

此処ノーレ密林は、中央のエリアは洞窟が広がっている。

そしてノーレ密林の大型モンスターは大抵、そのエリア6で休息を取るという。

それはババコンガも例外ではない。

そして大型モンスターは瀕死の痛手を負うと、特定のエリアに逃げ出して仮眠を取るという習性がある。

仮眠を取っている間、モンスターは体力をみるみる内に回復する事が出来る為だ。

しかし、それはこちらにとっては隙だらけでもあり、眠っている間に“少々辛口なモーニングコール”をプレゼントする事も、罠を仕掛けて捕獲する事も出来る。

そう、二人の作戦は「ババコンガが寝ている隙にとっと捕獲してしまおう」というものだ。

ならば、直ぐにババコンガが寝ているであろうエリア6に、体力が回復しきる前に急行するのが上策だ。

——しかし、このノーレ密林には“正体不明のアンノウン”が潜んでいる事も忘れてはならない。

道中に遭遇する可能性もゼロではなく、エリア移動の際は慎重に、

十分に警戒して行かなくてはならない。

エリアを跨いでは止まって周辺警戒、跨いでは止まって周辺警戒……というまどろっこしい作業にラストイはイライラし、その度にイリヤが諫めていたのは言うまでもない。

こうして二人は北東の原生林エリア2から、小さな無人島が望める北の海岸エリア3へ移動。

そこから南へ進み洞窟内部へ入り、エリア5を通過。

幸いにもアンノウンに遭遇する事なく、二人はエリア6へと辿り着いた。

洞窟の中であるエリア6は決して広くはないが、上を見上げれば高い天井に飛竜も楽々通れる程巨大な穴が空いてあり、そこから差し込む陽光が少し眩しい。

洞窟の入り口から土がある程度入り込んでいて、特にキノコ類があまりこちらに生えている。

そして、イリヤの予測通りババコンガはそこにいた。

「……ぐーすかと気持ちよさげに寝てやがんな、オイ」

ジト目でババコンガを睨みながら呟くラストイ。

ラストイの言う通り、ババコンガは身体を丸めて完璧に熟睡していた。

ポカポカ暖かい陽光を浴びながら、鼻提灯を浮かべて寝ている様は、滑稽にさえ思えてくる。

「それじゃあ、直ぐにシビレ罌を準備して。  
このまま捕獲に掛かるわ」

「りょーかい」

イリヤの指示に気の抜けた返事を返し、呑気に歩いてババコンガの元に向かう。

ザッ、ザッ……と足音を立てているにも拘わらず目覚めない辺り、ババコンガは相当深く熟睡しているのだろう。

顔面ブツ刺したら飛び起きそうだな、なんて考えながらラスティはポーチから支給品用の携帯シビレ罌を取り出す。

念のため、と言われてイリヤが持たせた支給品だが、その判断は正解だったようだ。

携帯シビレ罌を、ババコンガの腹に潜り込ませるように置く。

そしてそこから強風に飛ばされないよう安全に設置する為に、スパイクを展開して地面に刺す――

(……めんどくせエ)

――訳がなかった。

ラスティは面倒な設置手順の一切をカット。

携帯シビレ罌をババコンガの懷に置いたまま、安全ピンを引き抜きやがったのだ。

抜いた安全ピンを放り投げ、ババコンガから離れるラスティ。

後ろでイリヤがため息をつくが、気にしない。

そしてラスティが離れてすぐ、携帯シビレ罠が少しの時間差を置いて起動した。タイムラグ

円を描くように直径1メートル程の電流が地面に流れ出す。そして電流は、範囲内にいたババコンガに接触した。

「ボアア……ッ!？」

瞬間、電流は一瞬で体の隅々まで浸透し、全神経を麻痺毒に侵した。

よほど電流が良い刺激になったのか、一気に眠気が吹き飛び罠から抜け出そうと必死にもがき出す。

しかし、自慢の剛力も麻痺毒によって無慈悲に封じられてしまう。

——チャキ……

そんな中、イリヤはババコンガの正面に立ち、静かにヴァルキリーファイアを構える。

ヴァルキリーファイアの薬室から覗くのは赤い弾頭——捕獲用麻酔弾。

ギルドの科学者達の研究材料となるか、または博物館の剥製となるか。

どちらにせよ、ババコンガを再び安らかな、二度と目覚める事はない眠りへ誘うべく、イリヤはトリガーに指を掛ける。

「……Good night」  
おやすみ

そしてトリガーに掛けた右人指し指に、力を込め――

「ッ!？」

――られなかった。

突然、イリヤの表情は驚愕に染まる。

(嘘……!？)

このタイミングで……ッ!！)

イリヤの驚愕に呼応するかのように、背中に冷たい汗が伝い、全身に寒気が襲う。

イリヤは気づいてしまった。

ハンターとして培ってきた経験と直感が、“ソレ”を捉えてしまった――

(――今、確かに……  
地面が揺れた……?)

――アンノウンの来訪を。

——ズン………！

次いで耳に入ったのは、足音。

それは重々しく、場の空気を一瞬で凍てつかせる重圧を含んだ、絶望へのカウントダウンにも聞こえた。

「何だ………？

今の足音………？」

流石にラスティも気付き、辺りを警戒する。

謎の足音が一つ、また一つと聞こえる度に、地面が微かに震える。それも、足音は次第に大きくなり、併せて地面の震えも大きくなる。

——竜が、来る。

逃げなければ。ここから、今すぐに。

それなのに、何故………足が動かない？

まるで蛇に睨まれた蛙のように、一步も動けない。身体が言うことを聞かない。

ただの足音、しかしそれから感じる凄絶なプレッシャーに押し潰されまいと心を保つだけで、二人は精一杯だった。

——ズン………！！



今では遠かった足音が、かなり近くまで来ていた。

足音の方向から察するに、“奴”は隣の洞窟、エリア7から来る。やがて、“奴”は二人がいるエリア、エリア5へ侵入した。

エリア5に通じる横穴から、ゆっくりと……。

「「……ッ!?」」

“奴”の姿が見え始めた刹那、二人は声にならない叫びを上げた。

最初に見えたのは、牙。

それは口だけではなく、顎からも無造作に散りばめられたように生え並んでいる。

そして次第に、その体躯が姿を現す。

体全体に、緑がかった黒い皮と鱗。

前足は異常に小さく、また後ろ足は異常に大きく、その不釣り合いな四肢が二足歩行を可能としている。

尻尾は異常に長く、異常に太い。

そして——異常なまでに、巨大過ぎる体躯。

そこにシビレているババコンガぐらいなら、丸飲み出来てしまいそうなくらいに。

“奴”は、全てが“異常”で出来ていた。

「おい、まさか……嘘だろ……?」

わなわなと口を震わせ、なんとか言葉を絞り出すラスティ。  
彼は昔、暇潰しに父スパードのモンスター凶鑑等を見ていた為、目の前のモンスターも知っていた。  
それも“とびきりヤバイ奴”として特に記憶に残っている。

緑黒い皮に、顎にまで侵食している牙の群れ。

凶悪過ぎるその風貌に、人々は口を揃えてこう呼んだ――

「イビルジョー……かよ……ッ!!」

――  
“悪魔”、と。

**Act..15\ Demons guest【悪魔の来訪】（後書き）**

アンノウンの正体はジョー様でした。

しかも、かなりデカイやつを出させて頂きました。

軽く金冠サイズってますw

これ、ラストイ達死ぬんじゃねーか……？（汗）

まあ、3（トライ）でイビルジョーに苦い思いをした方は結構いるんじゃないでしょうか？

捕獲したりオレウスをディナーにされてクエスト失敗とかw

自分の場合、3（トライ）でドスジャギイ殺るだけの楽なクエストだったのに、いきなり地面からグバァー！！

「げ、何だこいつ！？

ちょッ、マジ強すぎ……ギャアアア！？」

と、なりましたし（爆）

アイツはマジで悪魔です。

というわけで、今回はイビルジョー乱入で大波乱の巻です。

しかも、次回はイリヤが……

まあ期待しないでお待ち下さいm（ ）m

**A c t .. 1 6 \ S c r e a m i n g   s o u l 【魂の慟哭】 \ (前書き)**

相変わらず短くてすいません……

え?どこかで見たことあるサブタイだって?

気付いた時には遅かったんです……

## Act..16(Screaming soul【魂の慟哭】)

「イビルジョー……かよ……ッ!!」

今回の依頼は、ババコンガ一体狩るだけの至ってシンプルなものだった。

しかし、今、目の前にいる“アレ”は何だ？

ババコンガを軽く凌駕する巨軀、緑がかった黒い鱗と皮、顎にも生え並ぶ荒々しい牙。

そして、万物をねじ伏せる圧倒的なプレッシャー。

“アレ”は最早、モンスターの域ではない。

モンスターのくくりに入れてはならない。

今日の前にいるそれは、恐怖そのものなのだから……。

しかし幸いな事に、イビルジョーはまだ二人に気付いていない。ただじっと、シビレ罫で動けないババコンガを睨んでいる。

(いや、違う……!!)

あれは気付いていないんじゃないかねエ……!!)

だが、ラスティの本能がそれを“否”と訴える。

ただ気付いていないだけなら、今すぐにでも二人は撤退していただろう。

それが出来ない理由は唯一つ。

（奴は俺達の事なんぞ“眼中にねエ”んだ……ッ！！）

腰はすくみ、両足の笑いが止まらない。

イビルジョーから放たれるプレッシャーから、恐怖から、目を背ける事が出来ない。

まるで“次はお前達だ”と語り掛けてくるように。

「ボアアアアア！！！」

沈黙する洞窟内に、突如ババコンガの怒号が反響する。

シビレ罫の効力が切れ、麻痺から抜け出せたようだ。

「ッ！？」

その怒号が発端となり、ラスティは呪縛から解放される。

ひとまず先ほどからずっと黙っているパートナーの様子を確認するべく、横のイリヤに声を掛けるが……

「おい、イリヤ……？」

ラスティは、思わず我が目を疑った。

イリヤは驚愕もしていなければ、恐怖に染まってもいない。

魂が抜け落ちたような、“虚無”と言っている表情だったのだ。  
彼女の無表情はいつもの事だが、今回のそれは全く異なる。  
不気味に静かで、無感情。

呆けたように、ぼーっと、イビルジョーを一点に見つめている。  
様子がおかしいのは明白だった。

「……ミ……」

「み？」

虚ろな瞳で、イリヤはうわごとのような声をだす。  
ラストイはそれを聞き逃さぬように反芻する。

「ツ……ケ……タ……」

ミツケタ……？

見つけた？

イビルジョーを見て、“見つけた”だって？

一体、イリヤは何を言っているんだ？

ラストイはもう、訳が分からなくなっていた。

素人目からみても、G級に匹敵するであろうレベルのイビルジョー  
の乱入。

その乱入者の介入に伴い、錯乱しだすイリヤ。  
ノーレ密林は今、混沌<sup>カオス</sup>を極めていた。

「ボアアアア！！？」

今度はババコンガの悲鳴に似た叫び。

直ぐにラストイはババコンガに振り返る。

——ブシャアア！！

真っ先に、妙な音が聞こえた。

まるで間欠泉から勢いよく水が飛び出るような、そんな音が。

「ッ……！！」

その光景を見て、ラストイは声にならない呻き声を上げて、強烈な嘔吐感に苛まれた。

無理もない。

今まさに、イビルジョーがババコンガの右腕を——喰いちぎっていたのだから。

右腕のあった箇所から、真っ赤な血が間欠泉の如く噴き出していたのだから。

「ボア！？　ボアア！？」



地面に伏し、激痛にのたうち回るババコンガ。  
出血量は凄まじく、瞬く間に血の池を形成した。  
痛々しい鉄の匂いが、鼻をつつく。

不意に、すう……と、ババコンガの軀に大きな影がさした。

その影は三つの大きな爪が扇状に並んだ——イビルジョーの剛脚。  
イビルジョーは持ち上げた片足を、容赦なくババコンガに降り降ろした。

——ドオオオン!!!!

火山が噴火したような、腹の底から持ち上げられるような重低音が轟いた。

地は激震し、烈風が巻き起こり砂埃を舞い上がらせる。

イビルジョーはゆっくりと、足を戻す。

そこには、原型も何もない、肉傀と成り果てた“ババコンガだったモノ”だけがあった。

（どこまでふざけた強さしてんだよ、こいつは……  
とんだバケモンだぜ……!）

ラスティは戦慄した。

たった一度、足で踏みつけただけで、奴は天変地異を起こすのだ。  
強いとか、そんな言葉で言い表せる次元ではない。  
格が違い過ぎる。

先ほどのやり取りを、誰が“戦闘”と言えようか？  
奴にとっては、それは“児戯”でしかなかったのだから。

イビルジョーは、肉傀となったババコンガに近寄る。  
そして口を大きく開け——ババコンガを食べ始めた。

——グチャ…バリツ…

身の毛もよだつ不快な音を立て、かぶりつくように咀嚼する。  
肉を、骨を、内臓を、一欠片も残さず歪な牙で碎いていく。  
恐らく、この世で最も残酷な食事風景だろう。

「クソッ、しっかりしやがれイリヤ！  
アイツのデザートになりてエのかよッ！！」

ラスティは未だ静かに錯乱し続けるのイリヤの肩を揺さぶる。  
奴のランチが終わったら、次の標的になるのは……言うまでもない。  
正氣に戻そうと、必死に呼び掛ける。

——が、イリヤから返ってきた反応は意外なものだった。

——カシャ……

——散弾LV. 2を、込め始めたのだ。

「イリヤ……？」

突然の行動に、ラスティの表情が曇る。

「……やっと、見つけた……。  
やっと……」

——カシャ……

イリヤは再びうわごとを呟きながらも、愛銃に散弾を込め続ける。  
指が震えて時折弾を溢しながらも、確実に薬室に装填していく。

「やっと巡ってきた……。 “悲願”を叶える、この時が……」

——カシャ……

尚も呟き続けるイリヤに、ラスティは本能的にヤバいと感じ始めた。

明らかに様子がおかしい。

彼女の中で、何かが狂い始めている。

今のイリヤは、まるで空気を入れすぎてパンパンになった風船のよ

うだ。

今にも感情が爆発しそうで、それを抑止するのが精一杯で……。  
もしも、ほんの少しの刺激を加えれば……“ボン”、だ。

一体、あのイビルジョーの何が彼女をそこまで駆り立てる？  
恐怖？生存本能？

いや、違う。

この事態を予測していた彼女に限って、こうまで取り乱すとは考え  
て難い。

だとすれば、何が彼女を狂わせているんだ……？

「やっと巡ってきた……。 皆の仇を討てる、この時が……！」

——カシャ……

“仇”？ それに“悲願”だって？

この瞬間、ラスティの疑問は確信に変わった。

この二つのキーワードを聞けば、後は猿でも分かる事。  
今、彼女がしようとしている事は……。

「やっと巡ってきた……。

サザンクロス 十字傷、貴様を殺せるこの時がッ……！」

——ジャキッ！

弾の装填を終え、勢いよくコッキングレバーを引き絞る。

イビルジョーも漸くイリヤの異変に気付き、食事を中断し此方に向いた。

——その時、確かにラスティは見た。

イビルジョーの額に生々しく刻まれた、“十字形の傷”を。

——理性という名の呪縛は今、解き放たれた。

「ア、ア、——！！！！！！」

彼女は叫ぶ。

声が枯れても、喉が千切れても構わない。

彼女は叫ぶ。

例えこの命が尽きようとも、己が仇敵を滅さんが為に。

彼女は叫ぶ。

憎悪と、後悔と、悲しみを、この魂の慟哭に乗せて。

「ッ！？ やめろ、イリヤッ！！」

ラスティの制止を振り切り、イリヤは突貫する。

その手に握られしは、“勝利の女神”の名を冠する猟銃、ヴァルキリーファエア。

今、その猟銃は“復讐の女神<sup>ネメシス</sup>”と化した——。



**Act..16(Screaming soul【魂の慟哭】)(後書き)**

とまあ、いきなりの急展開。

乱入モンスターにイビルジョーにした理由がこれです。

この話はイリヤを登場させた時点で考えていましたので、早く更新……出来るかな？(汗)

いや最近、遂にウチにも来たんですよ、避難民が。

おかげで毎日手伝い手伝い……。

チクショー！せっかくの春休みがアアアア！！

ラストイ

「アホ、避難民の人はお前の万倍辛い思いしてんだ。

それくらい察しろ。あと言い訳乙」

ぐッ、返す言葉もない……。

ちくせう、これが旅館の息子の宿命なのか……。

そういえば、ブレイブルーの新作でるね。

どうしょ、買おうかなー……。

プラチナたんペロペロ(変態)

**A c t : 17 〽 D e v i l t r i g g e r 【魔への引き金】 〽 (前書き)**

タイトルについては、もう何も言いませんw  
だってもうタイトルがネタバレだし(爆)  
では、どうぞッ！





ほんの一吼えで大気が超振動を起こし、洞窟が崩れんばかりに激震する。

「ッ！？ 鼓膜が……ッ！！」

その咆哮に、ラスティは骨刀を取り損ね、必死に両耳を塞いでしまふ。

これがバインドボイスの威力。

人間のそれを遥かに凌駕する咆哮は一種の超音波シヨックウェーブを生み出し、容赦なく鼓膜を刺激する。

結果、人間は本能的に耳を塞いでしまい、一時的に身動きが取れなくなってしまうのだ。

しかしそれでも、イリヤは止まる事はない。

彼女はもはや、理性を捨てた狂戦士バーサーカーと成り果てた。

バインドボイス咆哮の一つや二つ、今の彼女の耳には届かない。

「チッ……！！」

ラスティは思わず舌打ちを洩らす。

出鼻を完全に挫かれた。

もう間もなく、イリヤは接敵する。

このまま戦闘が始まれば、撤退が難しくなる。

何より、イリヤが危険だ。

——そして遂に、戦慄は切られた。

——ダダダァン!!

イリヤは走りながら、散弾L.V. 2を速射する。  
狙いもへったくれもない、粗暴な弾幕。

否、狙いをつける必要はない。

相手は巨大なイビルジョーだ。

的を外す方が苦勞する。

ただ息の根を止める事だけを考えて、引き金を弾けばいい。

——ビシビシビシッ!

放った散弾は全てイビルジョーに命中。

しかしそのことごとくが鱗を通さず、弾かれる。

それでもイリヤはイビルジョーに肉迫する。

「グルァァ!!」

今度はイビルジョーが噛みつきで反撃する。

まだババコンガの血肉が付着している歪な牙が、イリヤに迫る。  
だが——

「……!!」

なんと、イリヤは速度そのまま懷にスライディングして回避。  
ガチンッ！、とイビルジョーは虚空を噛んだ。

更にイリヤは、そのままイビルジョーの股下の地面を滑りながら、  
ヴァルキリーファイアを乱射した。

――ダダダンッ！

しかしそれでも弾丸は弾かれてしまう。

鱗の薄い腹部でも弾かれるとは、どれだけこいつの外皮は強固なの  
だろうか。

フルカスタマイズされたヴァルキリーファイアが、全く通用しない。

「ッ！ アァァァ！」

それでも、イリヤは止まらない。

地面を滑ってイビルジョーの背後に出たイリヤは、振り向き様に撃  
ちまくる。

だが直ぐに、イビルジョーは尻尾を振り回して反撃する。

それをイリヤはギリギリ伏せて回避し、今度は零距离に接近して脚  
部に撃つ。

「イリヤ、お前……」

そんな中、ラストイは目の前で繰り広げられるやり取りを、ただ  
啞然と見ている事しか出来なかった。

気が狂った狼のように暴れまわるイリヤと、そのイリヤが十字傷と  
呼んだイビルジョー。

その戦いは、激しいなどという安っぽい言葉で表現できるものでは  
ない。

イビルジョーが尻尾を振り回す度に、強烈な暴風が巻き起こり……  
足で地面を踏みつける度に地響きが轟く……

巨体に釣り合わない速さで、次々と重撃が繰り出される。

それをイリヤは無理に身体を動かし、ギリギリ直撃を避けながら立  
ち回っている。

狂気と狂気で彩られた決闘に、ラストイが割り込める余地も隙も  
なかった。

イリヤの憎悪が、突き刺すように肌に伝わってくる。  
まるで、“手を出すな”と示唆しているかのように。

（クソッタレ……！）

どうすりゃいい……！？）

今、下手に割り込めばイビルジョーの猛攻に巻き込まれるか、イ  
リヤの流れ弾をどてっ腹に喰らうかの二択しかない。

ヴァルキリーファイアの火力にかかれば、自分の纏うクックシリー  
ズなど紙切れ同然に貫くだろう。

それくらいに、今のイリヤは見境がないのだから。

（親父……最高にリスキーなこの状況、アンタならどうする？）

どうすれば、頭のネジがフツ飛んだイリヤを止められる？  
どうすれば、あのイビルジョー（バケモノ）に対抗できる？  
この時ばかりは、ラスティは困惑していた。  
そうしている間にも、戦いは苛烈さを増していく。

「奪ってやる……ッ！」

イビルジョーと戦いながらも、イリヤは感情をぶつけるように呟く。

「私から全てを奪ったように——！」

貫通弾Lv. 2を装填し、イビルジョーに目掛け構える。

「私の右目を奪ったように——！」

しかし撃ちはせず、イリヤは素早く横にサイドロールする。  
刹那、先ほどイリヤがいた所にイビルジョーの噛みつきが空振った。

「お父様と、お母様と……お兄様を奪ったように——！」

ローリングから流れるように膝立ちにヴァルキリーファイアを構える。

その時イビルジョーは、振り向き様に噛みつく体勢に入っていた。突き出た顎を大きく開け、醜悪な牙群がイリヤに迫る。

しかし、今度はそれを避ける素振りは見せない。

——狙いは、ついた。

「貴様の全てを——奪ってやるッ!!!」

——ダァンッ！

ターゲット・インサイト。

放たれた復讐の弾丸は、真っ直ぐイビルジョーの開いた口内へ突き進む。

弾丸はそのまま口を通過し、イビルジョーの喉を——貫いた。

「グルアアアアア!!?」

これには流石にイビルジョーは巨体をもたげ、苦し気に悶える。いかに鉄壁の防御力を持っていようと、内側は脆いもの。

どんな生物に共通して言える事。

散弾から貫通弾に変更したのも、これが理由だからだ。

イリヤは、“内から殺す”作戦に打って出たのだ。

だが、それではイビルジョーが口を開く一瞬しか攻撃のタイミングがない。

ひとつでも判断を謝れば、間違いなく死に直結する、非効率的で分の悪い戦術。

——いや、今のイリヤに理屈は通用しない。

例え刺し違えてでも、“悲願”を果たそうとするだろう。最初から、生きて帰るつもりがないのだから……

続けて、イリヤは悶えるイビルジョーに狙いを定め、引き金に掛けた右人差し指に力を込め——

——カシャン……

——られない。

抜け落ちるように、ヴァルキリーファイアがイリヤの手から離れ落ちた。

「クッ…、ハア……ハア……」

イリヤは崩れ落ちるように、へたりと地面に座りこんでしまう。連続しての無理な姿勢からの射撃が祟り、身体の節々が悲鳴を上げる。

過度の疲労で筋肉は磨耗し、立ち上がる力も出ない。身体が、限界を迎えてしまった。



「まだ……私は……!!」

いつもより何倍も重く感じる身体を無理矢理動かし立ち上がろうとするが、途中でバランスを崩して仰向けに倒れてしまう。もう、指一本動かす力も出ない。

「グルルルル……!」

呻き声が聞こえた方へ視界を動かすと、ダメージから持ち直したイビルジョーが此方を睨みつけていた。血の混じった赤い涎をだらしなく垂れ流しながら。

イリヤの視界は、次第にもやが掛かったように霞んできた。それに比例して、耳も遠くなってくる。

意識が、遠退く。

「……みんな……」

「ごめん……なさい……」

牙が迫る。

しかし、もうイリヤに抵抗する力はない。重い瞼が、ゆっくりと閉じていく。

——ツ——…

閉じかけた意識の中、ふいに自分の頬に違和感を感じた。

ああ、そうか。

これは“涙”なのか。

“あの日”以来、涙は枯れたと思っていたのに。

もう涙は流さないと、失われた右目に誓ったのに。

ただ、悲しくて。

悔しくて。

悲願を果たせぬまま、私は何も成せぬまま、ここで死ぬ。

でも、それでもいい。

これでやっと、私も家族のもとへ行ける。

きっと、怒られちゃうだろうな……

「———ったく、何がなんだかわかんねエぜ」

男の声。

いつも馴れ馴れしくて、けれどどこか憎めない男の声が。

まどろみかけた意識でも、それはやけにハッキリと聞こえた。

「だが、これだけは言えるぜ———！」

イリヤは閉じかけた隻眼を、残る力全てを使って、僅かに開いた。それくらいに、声の主が気になって。そして、イリヤの目に飛び込んだものは――

「お前を――悲劇のヒロインにはさせねェよ、イリヤ」

――男の背中だった。

広く、遅しく、見る者を安心させる頼れる背中。それがイリヤの視界に、朧気ながらも鮮明に見えたのだ。その男の背中には、まるで……

「お兄……様……」

ゆっくりと、金色の瞳を閉じる。

子守唄を聞きながら眠る少女のように穏やかな表情で、イリヤの意識は途絶えた。

「グル……!」

「焦るなよ……!」

その背中の主、――ラスティが苦し気に声を絞り出す。イリヤがイビルジョーに喰われる寸前、ラスティは間に割って入り、真っ正面からイビルジョーを受け止めたのだ。

突き出た顎から生えた無数の牙を両手で掴み、イビルジョーに押しきられそうになりながらも、ラストイは必死に耐える。純粋な力と力のぶつかり合い。

人間とモンスター、ましてや相手がイビルジョーでは、圧倒的に此方に分が悪い。

それでも、此方には負けられない理由がある。

村には、自分の帰りを待っている皆がいる。

何より、後ろにはイリヤがいるのだ。

だから……負けられない！

「グダグダ考えんのはもうやめだ！

俺は——」

——バチッ……

一瞬、ラストイの腕に“赤い稲妻”が走る。

「俺とイリヤは——！」

——バチバチッ！

“赤い稲妻”は次第に勢いを増し、身体全体を覆うようにほとばしる。

——否、これは“練気”。

ラストイの身体から、練気が溢れ出て、今にも爆発しそうに蠢いている。

その臨界点は、間もなく突破する——！

「——絶対に、生きて帰る——！！」

まさに、<sup>バースト</sup>爆発。

瞬発的に練気が爆散し、衝撃波となって空気を切り裂き、洞窟を震わせる。

「グルアア！？」

練気のバーストに瞬く間にイビルジョーの重い軀が吹き飛び、洞窟の壁に叩きつけられる。

すぐにイビルジョーは体勢を整え、ラストイに飛び掛かる構えをとる。

しかし爆発のせいで土煙が舞い、ラストイは見えない。  
警戒するように唸る。

やがて土煙が晴れ、視界が良くなっていく。  
それに伴い、ラストイの姿の見えてくる。

——が、そのラストイは“何か”違った。

身体の前には赤い練気の稲妻がほとばしり……  
身体からは、赤い陽炎がまるで残像のようにゆらゆら揺らめいている。

赤い瞳はさらに“紅く”、そして妖しく輝いていた。

“鬼人化”というものをご存知だろうか？

練気を全身に流し身体能力を強化する、双剣使いの奥義である。  
ラスティのそれは鬼人化に酷似しているが、違う。

「選べ——」

“人”を超え、“鬼”を超え、“魔”へと至る引き金——

「——道を開けるか、くたばるか……!!」

——デビルトリガー魔人化

音速の悪魔が今、牙を剥く——

## Act..17 Devil trigger【魔への引き金】（後書き）

はい、やっちゃいましたw

もうこれ『若干デビルメイクライ』のタグを『9割デビルメイクライ』に変えた方がいいですかね？w

ではとりあえず、“魔人化”についての補足をば。

ぶっちゃけ、双剣の鬼人化の強化版みたいなものです。

身体能力が劇的に上昇します。

どれくらい上がるのか、それは次話にて。

もう一つ凄いいことが出来るんですが、ネタバレになりますで伏せておきます。

ビジュアル的に言えば、“鬼人化”は赤い練気っぽいものが湯気みたいに出るだけですが、“魔人化”はそれに加えて身体の周りにバチバチ稲妻が走ったり、目が光ります。

見た目まで悪魔になったりはしませんから、デビルメイクライの“魔人化”よりも、ブレイブルーの“ブラッドカイン”状態に近いですね。

……すいません、分かりづらくて（汗）

というか、モンハンってどんなジョブでも練気使ってません？

大剣の溜め切りは赤い波動っぽい出るし：

双剣の鬼人化は赤い何かが身体から漏れてるし：

ランスのカウンターも赤い波動っぽい出るし：

ハンマーのチャージの光りとか、弓のチャージの光りとかetc  
これ全部、練気じゃありません？

結論【ハンターは皆、練気使える】

こんなモンハンも、アリですよね？



**A c t . 1 8 〽 D e m o n ' s p o w e r 【魔人の力】 〽 (前書き)**

W O R I N G ! W O R I N G !

今回の話、もはやモンハンではありません！

マジでぶっ飛んだ内容となっています。

それを覚悟の上で読み下さい……！

## Act..18\Demons power【魔人の力】

「選べ……。」

道を開けるか、くたばるか……!!」

紅く煌めく瞳で、ラスティは真っ直ぐイビルジョーを威圧する。  
禍々しい真紅の練気が身体中から陽炎の如く溢れ、赤い稲妻がバチバチとほとばしる。

もし第三者がラスティを見たら、誰もがこう口にするだろう。

——まるで、悪魔のようだ、と。

「グルアアアア!!」

自らをを鼓舞するかのように、イビルジョーは咆哮する。

だが、その咆哮にいつものような圧倒的な迫力が感じられない。

まるで子犬が獅子に吠えるような、確かな“恐怖”が滲み出ていた。

「ハッ、聞くだけ野暮だったか」

唾と一緒に言葉を吐き捨てるラスティ。

改めて正面から対峙してみると、本当にこのイビルジョーは理不尽な大きさをしている。

モンスターの大きさを示す最大級の値、ゴールドサイズ金冠を軽く上回るぐらいはある。

奴にかかれば雄火竜リオレウスさえも、先のババコンガ同様“ペロリ”だろう。ラスティの得物が届くのは、精々顎か足だけだ。

両の拳を力強く握りしめる。

桁外れな量の練気が身体中を駆け巡り、力がみなぎってくるのが分かる。

——俺の身体に、何が起こった？

気付いたら、身体の中の練気が一気に膨張・爆発し、イビルジョーは吹き飛び、身体は“これ”だ。

何故こうなったのか、ラスティ自身も分からない。

だが、これだけは確信を持って言える。

これならやれる、と。

骨刀【狼牙】を抜刀し、ラスティは真っ正面からイビルジョーに向かって駆ける。

細い刀身に赤い稲妻を纏い、練気の残像が出来る程速く、風のように走る。

気付けば、イビルジョーはもう目と鼻の先だった。

「イイイヤアア!!」

走る勢いそのままに、渾身の力を込めて牙が群生する顎を横一文字に薙ぐ——!

——バキィッ!!!!

「グリアアアア!!?」

凄まじい破碎音が響き、イビルジョーは大きく首を仰け反らせた。練気を纏って切れ味が上がっても、流石に骨刀では斬り裂くことは叶わない。

だが今の一撃で、奴の顎から伸びる牙が、全て粉々に碎かれた。

「おらおらおらアア!!」

そして始まる、ラストイの怒濤の猛撃。

イビルジョーの頭部を、斬れもしない骨刀でひたすら殴り続ける。

「でいやア!!」

懷に潜って殴り……

「ブツ飛べ!!」

横腹を一瞬で回り込んで蹴りとばす。

赤い残像が瞬く度に、爆発のような凄絶な衝撃音が轟き、イビルジョーが踊り狂う。

まさに、暴力の嵐。

そこには何のルールも主義主張もない。

あるのは、ただただ純粹な“力”のみだ。

「このゴミ野郎が!!」

イビルジョーの頭部を洞窟の壁に叩きつけるように蹴り、さらに顔を骨刀で殴り再び壁にねじ込む。

「グルアアア!!」

が、このままされるがままのイビルジョーではない。

目の前で追撃しようとするラスティに、壁に叩きつけられた体勢のまま噛みつこうと口を開ける。

――が、口より突き出た顎が災いした。

「うるせェんだよオラァ!!」

迫るイビルジョーの顎を、ラスティは荒っぽく蹴り上げた。

イビルジョーの巨体が浮き上がり、勢いよく地面とキスと果たす。

今のラスティの辞書に回避という文字はない。

力には、より強い力でねじ伏せるだけだ。

イビルジョーがいくら噛みつこうが、踏みつけようが、尻尾を振ろうが、全てラスティの一撃に弾かれ、傷が増えていく。

「グルアアアアア！！！」

これでは分が悪い。

そう判断したイビルジョーはラスティの頭上を大きく跳躍して距離を取り、着地したと思ったら即座に首を大きくもたげる。

僅かに開いた口からは、赤く黒い禍々しい光が収束し始めていた。ラスティは構わず、再びイビルジョーに突撃する。

「グルアア！！」

そしてイビルジョーは正面から迫るラスティに向かって、もたげた頭を振り降ろし、口を大きく開けた。その瞬間――

――バアアアア！！

イビルジョーの口から、赤黒い光が放たれた。

ブレス攻撃。

禍々しい稲妻の奔流は真っ直ぐ放射状に空気を飲み込みながら進み――ラスティを飲み込んだ。

まごうことなき、直撃。ラスティはブレスに完全に飲み込まれ、もう影も見えない。

イビルジョーは勝利を確信し、さらにブレスを濃く、大きく撃ち続ける。

——ズバァアア——！

だが、突如耳をつんざく斬烈音が響いた。

瞬間、ブレスがまるで水が弾けたようにかき消えたのだ。

そして、ラストイは全くの無傷、おまけに骨刀を振り上げた体勢で立っていた。

これにはイビルジョーは驚愕した。

同時に、一つの推測が頭を過る。

——まさか、ブレスを“斬った”のか——？

「うおおおおおお！！！」

もはや、ラストイを止める術はない。

ラストイは暴風の如く、イビルジョーを蹂躪する。

次第に刃が刃こぼれしてくるが、関係ない。

ただひたすらに、本能の赴くままに殴る殴る殴る殴る殴る殴る……！！

反撃など許すな。

攻撃の手を緩めるな。

一切の容赦、手加減、情けをかけるな。

このまま一気に、決着<sup>ケリ</sup>をつける——！！

「Now you die!!（とつとと死にやがれ!!）」

——ドゴオオ!!

トドメの一撃に、持てる力全てを込めて、骨刀をイビルジョーの頭部——十字の傷跡に叩き込んだ。衝撃で大量の砂ぼこりが舞い、地面に大きなクレーターを開け、イビルジョーは倒れ伏す。

——ドスッ

そして、舞い上がった“折れた骨刀の刀身”が地面に刺さった。まるで、舞台の閉幕を告げるかのように。

ノーレ密林に、静寂が戻った。

「ハア……ハア……、やったか……?」

息を荒げて肩を大きく上下させるラスティ。

それに伴い、身体を包んでいた練気はかき消えるように霧散し、魔人化状態が解ける。

戦闘時の緊張も解けたせいか、一挙に疲労感と倦怠感に苛まれ、ラスティはがくりと膝をついてしまう。

練気で強化した骨刀が折れる程殴りまくったのだ。いくらイビル



ジョーといえど、気絶は免れないだろう。  
現に、今はピクリとも動かず倒れている。

「ク……ハハ……ハハハハ」

思わず、呆れたような乾いた笑いが零れる。  
何だこの力は？

急に視界が冴えて、頭の中がクリーンになって……

後はただがむしゃらに、イビルジョーを“お手玉”していた。  
殴り、蹴りとばし、骨刀で叩き伏せて……。

——冗談でもタチが悪いぜ。

人間が竜を殴りとばすなんて話、誰が信じる？  
おとぎ話にもなりやしない。

「……とりあえず、ベースキャンプに戻るか」

重い腰を上げ、ラストイはフラフラした足取りで倒れているイリヤの元へ向かう。

途中でヴァルキリーファイアを拾い腰のラックに吊り下げ、ついでに飛散したイビルジョーの鱗を数枚ポーチに入れる。

ドンドルマに戻った時、これを証拠にレヴィに問い詰めるのだ。  
報酬の5倍は上乘せしてもらわなければ気が済まない。

「よっ……と。」

「……重いな……」

イリヤの身体を掬い上げ、横抱きに――所謂、お嬢様抱っこ――持ち上げる。

重いと呟いたのは、なにもイリヤの体重が、という意味ではない。小さく華奢な少女に秘められた、悲しき過去。

断片的ではあるが、それが嫌でも感じ取れるほど、イリヤの寝顔は哀しく、寂寥なものだった。

「こんな細エ身体で、無茶しやがって……。

ま、俺が言えた義理じゃねエな……」

イリヤの寝顔を覗いて、小さくため息を漏らすラスティ。

色々ありすぎて、今日は本当に疲れた。

とつとベースキャンプに戻って一眠りしよう……

――グルルル……

「ッ!？」

ビクンと心臓が跳ね上がる。

聞こえてはならない声を、ラスティは捉えてしまった。

予想される最悪のビジョンを振り払いながら、恐る恐るラスティは振り返る。

そこには――

「グルルルル……!!」

——しかと二本の足で立つ、イビルジョーがいた。

痣だらけの巨軀は痛々しく、血の混じった涎を垂らしながらも、ラストィの前に立ち塞がる。

お互い、満身創痍。

だがラストィの得物は壊れ使い物にならず、おまけにイリヤを抱えている。

状況は、圧倒的に此方が不利だ。

「無駄に粘るね、ベイビー……」

軽口を飛ばすも動揺を隠せず、額に冷たい汗が滴る。

絶体絶命、それでもラストィはイビルジョーの双眸から目を逸らさない。

目を逸らした瞬間、奴は間違はなく、喰いに掛かる。お互い一步も動かず、完全に膠着状態に陥る。

先ほどの嵐のような戦闘が嘘のように、凍てついた空気が支配する。

——だが、それは唐突に訪れた。

「グ…アア……ッ!!」

イビルジョーが勢いよく吐血したのだ。

ラストィの猛攻は内臓も破壊したのだろう、口から滝のように血を吹き出し、足元に血溜まりが出来上がる。

「こいつはツイてるぜ……!!」

この隙を好機と見、ラストィは軋む身体に鞭を打ち、全速力で洞窟から離脱した。

吐血が止まり、イビルジョーが落ち着いた時には、もう二人の姿は消えていた。

「グルアアアアアア!!!!!!」

こうも自分をズタボロにくれた人間を、取り逃がした。  
イビルジョーの怒りの雄叫びが、ノーレ密林に虚しく響き渡った……

## Act..18\Demon's power【魔人の力】（後書き）

お分かりいただけただろうか？

これが魔人化です。

鬼人化？そんなものとは比べものになりません。

なにせ、モンスターを殴り飛ばせるんですから（爆）

文字通り“魔人”のような力を得られます。

しかしその代償に、体力はゴツソリ削られて、まともに戦闘出来なくなっちゃいます。

諸刃の剣ってヤツです。

ラスティ本人は魔人化なんて単語を知りませんし、なぜ発動できたのかも、彼には分かりません。

ですので、それらの詳しい説明は追々していきたいと思います。

話は変わりますが、先日新潟の専門学校オープンキャンパスに行ってきました。

めっちゃ楽しかったです！こりゃ大学だけじゃなくて専門学校も視野に入れた方がいいかも。

マジでAO入試対策しとかなきゃ。

剣道部長やってるし、とりあえずAO特待生の条件はクリアだぜイ  
イヤッホウウウ！！

**A c t . 1 9 \ O n e , s e a r n e s t w i s h 【悲願】 \ (前書き)**

……と、とりあえず遅れた言い訳は本編の後に（汗）

Act. 19. One's earnest wish【悲願】

——痛い——

——熱い——

——心が、身体が——

——右目が、焼けるように熱い——

——どうして、こんな事になっちゃったんだろう？——

——みんな、もう動かない——

——真っ赤に染まって、もう動かない——

——お父様も、お母様も——

——大好きなお兄様も、みんな——

——みんな、あの悪魔に■されてしまった——

——額に十字の傷を持った悪魔に、■されてしまった——

——わたしも、■されちゃう……の……？——

——こ■される、こ■サレル……——

——……コロサレル……！？——

「ッ!!!?!」

右目を眼帯で覆った少女——イリヤは飛び起きるように目を覚ました。相当うなされていたのだろうか、息は荒く、額から大粒の汗が流れる。

「また、この夢……」

苦しげに荒い息を繰り返すイリヤ。

息を整える事に集中し、短い間隔で何度か深呼吸し、動悸が落ち着いてくる。

「——大分うなされてたな、俺に襲われる夢でも見たかい？」



何の前触れもなく耳に入ってきた男の声に、イリヤは目線だけ向けた。

「ラス……ティ？」

「Good morning イリヤ。生憎、今はもう夜だけだな」

視線の先には、いつもと変わらない軽口を叩く赤毛の男——ラストティが、マグカップ片手にウインクを投げかけた。

イリヤは今になって、自分はベースキャンプのベッドに寝かされている事に気が付く。レイア装備は脱がされ、今の自分の格好はインナーだということも……。

「……!!?」

反射的に、イリヤは全身を隠すように布団にくるまった。

当然の反応だ。防具の下に着るインナーなど、全く以て下着と変わらないのだから。

頬をほんのり赤く染めるも、左目を鋭利に尖らせてラストティを睨みつける。

「……変なことしなかったでしょうね？」

「ご想像にお任せするぜ、ベイビー」

ニヤリとした笑みで返すラスティ。この思わせぶりな発言に、イリヤはさらに顔を真っ赤に噴火させる。

すぐにでもヴァルキリーファイアでこの野郎に撤甲榴弾をブチ込みたかったが、インナー姿を晒せる訳もなく、布団にくるまったまま唸るしかなかった。

レイア装備を着たままでは寝づらいのは分かっているのだが、男の……それもラスティに脱がされ、知らぬ間に乙女の肌を見られたとあっては、イリヤにとっては並の羞恥ではない。穴があったら入りたい。

ふと、イリヤは一つの疑問にぶつかった。

「……そういえば、なぜ私はここで寝ていたの？」

確か此処ノーレ密林へは、ババコンガの討伐依頼で来たはず。

目標と接触し、洞窟へ追い詰めた所までは記憶しているのだが……そこから先が思いだせない。

何らかのアクシデントが起こったような気がするのだが、まるで霧がかかったように、はっきりと思い出せない。

脳が思い出す事を拒否しているようで、それはとても気持ちが悪かった。

「そりゃお前、この前のイャンクック戦みてえに土壇場でトチった

んだよ。

大変だったぜ、気絶したお前を守りながらババコンガ倒すの。  
まあ飲めよ。ただのレモネードだが、落ち着くぜ」

「あ、うん……ありがとう」

ラストイは焼け石に乗せたやかんからもう一つのマグカップに注ぎ、イリヤに差し出した。

ほのかに湯気が立ち、甘酸っぱいレモンの香りが鼻孔をくすぐる。  
イリヤは口を火傷しないように、それを少しずつ口へ含ませた。

「ん……おいしい」

「だろう？ 我がフェルト村原産のレモンなんだ。  
果物から米まで、よりどりみどりなんだぜ」

それから得意げに村の自慢話を始めるラストイ。  
だがイリヤは適当な相づちしか打てず、表情は晴れない。

何かが……何かが抜け落ちている感覚が、身体から離れない。  
ラストイに誤魔化されているようで、何か重大な事を忘れている  
ようで……。

———グルア……ア……アア———

「ッ!？」

突如、遠吠えのような低い唸り声が、ベースキャンプを吹き抜けた。

獐猛で狂暴な、悪魔の慟哭。

空も震える凶声は、イリヤの意識を揺さぶった。

マグカップが、イリヤの手からこぼれ落ちる。

「ア…アア…!!」

記憶がフラッシュバックし、頭の中を掻き乱す。

洞窟に乱入してきた、一頭の獣竜。

瞬く間にババコンガを蹂躪する、血に濡れた爪と牙。

自分から全てを奪い尽くした——サザンクロス十字傷の悪魔。イビルジョー

グール屍人のように、イリヤはゆっくりとした動作でベッドから降りる。

アイテムボックス横に置まれた自分の装備一式を確認し、身体を引きずるように歩いていく。

まだ頭が打ちつけられたように痛む。身体もイビルジョーと交戦した際に酷使しすぎたせいか、骨は軋み、全身が張り裂けそう。

それでも、行かなければならない。

光を失った右目が、疼く。

奴は近くにいる、と……。

光を失った右目が、囁く。

奴を殺せ、塵一つ残さずに、と……。

光を失った右目が、吼える。

自らの“悲願（復讐）”を成せ、と……！

悲鳴を上げる身体を無理やり引きずり、漸くイリヤはアイテムボックス横に辿り着いた。

震える手でヴァルキリーファイアのグリップを掴み――

「――“お兄様”、か」

イリヤはゆっくり、横に振り返る。

いつの間にか、ラスティがイリヤのすぐ横に立っていた。ちょうど、ベースキャンプの出入り口を塞ぐように。

レモネードを一口啜り、ラスティは続ける。

「お前がブツ倒れる間際に言った言葉だよ、イリヤ。

お前とあの十字傷野郎の間に何があったのかなんぞ知らねえし、興味もねえ。

一つハッキリと分かんのは……イリヤ、お前じゃ無駄死にするだけだ」

「……そう」

今にも消えそうな声で、素っ気なく返事を返すイリヤ。

そして俯いていた顔を上げ、ラスティと目を合わせた。――ラスティの額に、銃口を突きつけて。

「……残念だわ」

サザンクロス  
十字傷は目の前にいる。

奴の処刑を阻む者は、誰であろうと許さない。たとえラスティでも障害となるのなら、今のイリヤは躊躇わない。

イリヤの虚ろな左目が、冷徹な銃口が、ラスティの眉間を捉えた。

「最後に一つ聞くわ。

墓になんて書けばいい？」

「“バカにつける葉はねえ” って書きな」

引き金に掛けられたら指に、力が込められる。

「さようなら、ラスティ」

——— ダァン！

ラスティのマグカップが、地面に転がった。  
カップの側面に、赤い鮮血を散りばめて……。



Act..19\One's earnest wish【悲願】（後書き）

バリクソ遅れてすいませんでしたアアアアア！！（エアトリ  
ツク土下座）

ええ、ただのブランクです。

『Keep yourself alive』に集中してた事もあり  
ますが、とにかく絶不調&不慮の事故が重なって……。

その上こんなに短いとか、もう首吊ってきます（！）

いやもうホント、こんな間空けてすいませんでしたm（＿）m

話しは変わりますが先日、専門学校受かりました！

ついでに特待生ももぎ取りました！

後は卒業まで遊ぶだけだぜビヤッハー！！

……まあ、数学と科学赤点なんですけどね（爆）

卒業さえ出来ればいいんだよチクショー（泣）

さて、次回の予定は……例によって、いつになるか分かりませんね

（汗）

こんな不定期更新ですが、見捨てないでください（懇願）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3232l/>

---

モンスターハンター 【賢者の遺産】

2011年11月14日15時09分発行